月刊ナイトバグ　全自由投稿参加型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 1月号
初夢も一から三までリグル尽くし
お正月特集
新連載ＳＳ
ずっと一緒に　～－２～　壁々
蛍を呼ぶ甘露の罠・前編　銅おりは
最終回
夏の終わりに散る花と……
蛍火は幻想のように儚く消え逝く
～Bustum Lucciolae～《晩夏》　西遊
31ページぶち抜きライヴ！！
Wriggle the last song. Jade.
好評作家陣
SS：くろと/如月翔/夏樹 真
漫画：HOUSE/羅外/草葉/Step/ひどぅん/草加あおい/東/くらげん/キッカ/preludenano

月刊ナイトバグ９月号掲載
紅軍鉢巻リグルが
待望（？？）の立体化！？
Side
Front
なぐらないで>ロく
☆ねんぷちの岩崎さんに触角つけただけです。

月刊ナイトバグ　2010年1月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

さして不思議でもなく

著者：くろと

コンコンコン。と玄関からノックの快音が聞こえてきた。突然の訪問者に私は食事の手を止め、急ぎ足で玄関へと向かうのである。私は「はい」と一声掛け、戸を開けた。そこに立っていたのは見知らぬ少女である。

　彼女に引き摺られるように遣ってきたのは、霧の湖に囲まれた孤島に建つ、全体の外壁と屋根を紅く染めた洋館だった。それは里から紅魔館と称される建物であり、悪魔の巣窟と呼ばれる危険な場所だった。いつだったか里の退治屋が修行のために勇み込んだところ、危うく門番に殺される手前までいき、偶然にも魔法の森の魔法使いが引き起こした混乱に乗じ、なんとか逃げ出したという。

　彼女は相変わらずに私を引っ張り、ズカズカと正門を進んでいく。門には先述のとおり門番が居た。背丈が高く、眼光も鋭く、傍目からして女丈夫のようである。門番は、進もうとした私たちを当然ながらに引きとめようとしたが、彼女の顔を認めるなり塞ぐのをやめた。私は訳がわからなくなってきた。分かるとすれば、彼女が紅魔館に関係があるのかも。というぐらいだろう。

　どういう意匠で建てられたのか、正門を抜けて廊下側すぐにある降り階段を手摺りに沿って進むと、広大な地下大図書館に出てしまった。そこには昨今の専門書は勿論、学者や魔法使いなら咽喉から手が出るほどのものが無造作に、まるで塵埃のように本棚へと積まれている。だが、この図書館には悪魔や魔女が住み着いており、さながら不用意に踏み込もうものなら、あっという間に紅茶かケーキの素材として第二の儚く短い人生を歩む事になる。という噂だ。私は今更に恐ろしく、そして心細くなった。どうしてここまでついてきたのか、それを不思議にしてやまない。と目の前に影がチラついた。それは少女の形をしており、白いローブのような服に、三日月を模倣した飾りをつけた、白いナイトキャップを被っている。私は電光石火で考え抜いた。この少女はおそらく、噂の動かない大図書館ではないか、と。

「誰？　……どうやってここに？」

　と少女の言葉だ。私はなんと説明しようかと迷い、けれど正直に告げることとした。

「この子に連れてこられたんです」

「この子？」

「だから……え？」

　私はこの時になって起きていた珍事に気付いた。そう、私をこの大図書館に連れてきたはずの、あの少女がどこにも居らず、服の端すらも見えないのである。狼狽する私の態度に、紫色をした少女は胡散臭そうな眼差しを向けてきた。そして溜め息を吐いて、四脚の椅子へと腰をおろす。少女は私にも座るように進めて、私が座ると説明を求めてきた。

「あんた……誰かに連れてこられたのでしょう？」

「えと、はい。そうです」

　狼狽しながらも素直に返事をする。

「そいつの顔か服装、思い出せる？」

「？」

　一瞬、質問を図りかねたが、すぐに情報を求められていると分かり、説明しようとした。

「あ、思い出せない？」

　私はうっかり思考を漏らしてしまった。それを耳にした少女は、「そう」と呟き、顔をうつむかせ沈黙した。それは思案しているよ

うで、私は声を掛け損ねた。きっかり一分後、少女は面を上げた。
「もう帰っていいわよ。咲夜、この蛍を外に送り届けて」
「ちょ、ちょっとっ……」
　少女が口早に出した言葉に私が口を挟もうとしたとき、「え、えええ？」私は正門の前に突っ立っていた。後ろを振り向けば、あいも変わらずに大陸出身と思われる中華風門番が仁王立ちしている。何がどうなっているのか、まるで分からなかった。しかし、門番は私を二度も館には入れようとせず、ただ、帰れ、と目で話していた。仕方なく私は帰路についた。その夜、私は不思議に思いを馳せながらも、睡眠の誘惑に負けていった。

　コンコンコン。と玄関からノックの快音が木霊していた。それに気付いた私は寝巻きながらも、急ぎ足で玄関へと出向いた。私は「ふぁい」と眠そうな返事を一つし、戸を開けた。玄関前のノッカーは少女である。
　二度目である。私を引き連れて彼女は紅い絨毯の上を闊歩していた。しかし、私はそれをさして疑問に思うこともなく、けれど恐る恐るついていった。正門を抜ける時、やはり門番が私たちを止めようとしたが、彼女の顔を見るなりにそれを止めたのだ。そういえば聞いたことがある。紅魔館の門番は、自分が認めたものに関しては門を素通りさせる、という噂だ。最初はありえないと思っていたが、これでは真実と考えたほうが正しいだろうし、思考も混乱せずにすむ。
　今度も地下の大図書館に向かうかと思い込んでいたが、彼女は私を引き連れて階段を上に、何段と上がっていた。それは長く果てない道のりで、階段を上りきると、今度は外観からは想像もできない長大な廊下、それを越えると、また階段が見え、それをまたも上がる。という事を幾度となく繰り返した。まるで地図も持たずに迷宮へと迷い込んだ旅人のように私は館内を彷徨い続け、心身ともに疲れ果てた。もう歩けないと思った時、唐突に迷宮の出口へと辿り着いたのは、偶然ではないのだと感じた。出口とは重厚な鉛製の扉であり、どうしてそれを出口と感じたのかは定かではない。しかし、今更引き返して帰れる気などせず、止む無く、この重苦しく所々が錆びた鉛の扉を開け放った。
　扉の向こうは小さな室だった。といっても外から見た屋敷と比較した私個人の感想なので、普通に考えれば十二分に大きい室だ。内装だが、床には正門にあったのと同系色の紅い絨毯が敷かれており、壁には油彩の絵画がいくつか掛けられている。また窓などは一切なく、天上には空調用の扇風機がゆっくりと四枚羽根を回している。扉から右横の壁際には木製の机があり、机上には垢擦れた古い冊子と『Ｓｉｇｎ　ｏｆ　Ｆｏｕｒ』と題うたれた小説が読み掛けで置いてある。読み掛けなのは小説の半ばに挟まれた栞から判断した。垢刷れた冊子のほうは何度も読み返した形跡があり、手に取ってみると今にもボロボロと崩れそうだった。当時の年月日も印されており、この冊子が一八四一年四月のものだとわかる。頁を開いてみると……、「誰？」と、ここで私の黙考は途切れた。珍しい羽根付きの少女が一人、寝台の上であぐらを掻いている。少女の瞳は暗闇でも映える、生き血のような赤で、その視線の先に私が居た。
　ようやくにして思い至った、ここは誰かの個室である。
「私の部屋に侵入者が来るのは久しぶりだなあ。前はあいつが……、まあいいや」
　赤眼の少女は流れる動作で寝台から降り立ち、まるで玩具に目を輝かせる子供のように、八重歯を剥き出しにし、嬉々とした表情を作った。
「なにして遊ぶ？」
　そんな軽口に対して私の体が反応した。産毛が逆立ち、歯の音が合わなくなる。
　少女から発せられる常軌を逸したような感情の類、私は恥ずかしながらに、目の当たりにしたその感情に竦み、体の自由を失っていたのだ。だが、少女は私の恐れなど露知らずに、その瞳孔よりも赤い、赤銅の太刀を後ろ手に精製していた。その赤色を見たとき、私の息が一度、確かに止まった。
「へー。強そうだね」
　とは私の背後からの言葉で、私の頭は真っ白になった。しかし、そのとき微かに感じた

のは、帽子を目深に被った少女が、赤眼の少女と対峙する光景だ。
　次に意識が覚醒した時、私は正門の前で惚けていた。壁に寄りかかった門番が、帰れ、と目で訴えている。

　コンコンコン。と玄関から呼び出しのノックの快音が、私の無意識を揺り起こしていた。私は玄関へと急ぎ足で向かい、「はーい」と戸を開け、彼女を出迎えた。微笑む彼女は当然のように私を連れ出したのだ。
　三度目の正直か、私は紅魔館の目前にいた。今日は門番が居らず、正門は開け放たれていた。彼女は私を引きつれて、易々と館内に侵入する。向かう先は、いくつもの廊下と階段と踊り場を抜けた場所。背丈よりも遥かに大きな時計台が、天文に浮かぶ恒星や月光の煌きに照らされている。
屋上だった。
　時計台の上には一人の女性が、黒い対翼を生やした彼女が、赤錆びたような黒い瞳で私たちを見下している。
「近ごろ当館への侵入が多くてね。今日は不法侵入かい？」
「あなたは小悪魔ね。どうしてそんなところに？」
　少女から、小悪魔。と称された女性はされど、くつくつとした苦笑を零した。
「この場所が気に入っているだけ。ところで夜道を徘徊するのは我々の特権だ、そうは思わないのか？　おまえはいつまでも無意識に篭っていればいい。それとも当家の館主と争うのか？　だったら気をつけたほうがいい。というのもね、お嬢様はこらえ性が足りないんだ、きっと串刺しにしてくれるさ」
「何をしに来た、とか聞かないの？」
　その言動に小悪魔は、ふン。と鼻を鳴らし、失笑した。
「当館では二四時間、あらゆる問題が発生し、暇を余すお嬢様と熱心なメイド長が解決する。今回もそのうちの一つだよ」
　小悪魔は馬鹿げていると、私たちに嘲笑うような視線を送ってきた。
「一昨日の魔道書盗難事件も、昨日の妹様襲撃事件も、今日の門番誘拐事件も、解決するのはお嬢様。では後ろを向くといい」
　言われたとおり、私たちは後ろを向いた。少女がいる。
　その少女とは今まで会った者達でも、一番幼く見える容貌の少女だった。しかし、その雰囲気とは今までとあまりに桁が違う。特に背に生えた一対の翼は、夜を内包するほど、気高く感じられた。
「どうしようかしら。事件が早くも解決してしまったわ。私が退屈だというのに」
　対翼の少女が喋りながら垣間見せる八重歯は、可愛らしいはずなのに、私には一体いくつの血管を噛み切ってきたのだろうか。という疑いしか浮かばない。
「このままでは退屈に終わってしまうわ」
　対翼の少女は自ら出した結論に口元を歪ませ、中指と親指で快音を鳴らした。すぐに現れたのは、一人の侍女と複数の妖精だ。侍女は銀をあしらった短剣を握り、妖精たちは箒やハタキを携えている。
「手数は揃えたわ。さあ頑張りなさい」
　と笑顔で応援されてしまった。状況が呑み込めず、私が小悪魔に視線を戻すと、小悪魔はもういなかった。私は困り果てて隣の彼女を覗いた。彼女は状況を嬉しそうにし、同じく笑顔で相対している。
「やっぱり地上っておかしいね。ねえリグル。今度は永遠亭に行ってみようよ。昨日の子も誘ってさ」
　微風が、古明地こいしの髪を撫でていた。だが、こいしは何かに気付いたように不思議な顔をし、警戒態勢を取る者たちに告げた。
「私、門番のことは知らないよ？」
　それを聞いた館主と侍女は一瞬だけ呆然とし、すぐに侍女の姿が消えた。次に侍女が現れたとき、洋服の半分に返り血が付着していた。私はあえて何も聞かなかった。より正確にいうと、聞く暇もなく気絶したからだ。

　コンコンコン。と今日も玄関からノックの快音が響いている。

（終）

〈作者コメント〉
　コメントなし

蛍火は幻想のように儚く消え逝く

〜 Bustum Lucciolae 〜《晩夏》

著者：西遊

††

ゆく蛍雲の上まで去ぬべくは
　秋風吹くと雁に告げこせ

††

あれから何日経ったのか覚えていない。いつ死んでもいいようにと、日々を一生懸命生きてきたから。
それでも、朝起きて、リグルは気付いた。
身体が軽い。頭の重みがなくなった。
そうか、
今日、
私は、
死ぬんだなと、
本能で、
気付いた。
だから今日は、あそこへ行こう。
死に場所は、とっくの昔に決めていた。

††

太陽の花畑の向日葵は、夏の終わりと共に散り始めていた。
　それでも、夏はまだ終わっていない。物事は今際の際が最も美しいもので、花は咲くのも散るのも美しい。
　それに、花が散っても、そこには種が残る。花が散ってしまうのは悲しいけれど、そこにはきちんと生きた証が残る。その生きた証はまた芽を伸ばして、やがてまた綺麗な花を咲かす。輪廻転生、それは仏教の考え方で、私は無宗教だけど、魂は死なないから死は終わりではない――私は、そう考えている。
　それは、花を操る妖怪が一番知っているはずなのに。
　彼女は何故、そんなに死を恐れているのだろう。
　その答えを、聞きたくて。
　もう一度、彼女に逢いたくて。
「幽香さん！」
　私は叫ぶ。
「幽香さん！！」
　私は叫ぶ。
「幽香さん！！！」
　私は叫ぶ。
「私、ずっと夢だと思ってたんですよ！　でも、それは夢じゃなかった！　幽香さん、私が眠ってた時に、三回呼んでくれたんですよね！　だから私も、三回呼びましたよ！」
　あの夢現の中で、彼岸と此岸の境界で、誰かに呼ばれて帰って来れた。その声は、いつも笑顔が似合う温かい彼女の声。
　叫んだ拍子に咳が出る。怖ろしいほどに体が軽かった朝とは打って変わって、今はもうそのままここに蹲ってしまいたいほどに体が押し潰されそうなほどにこのまま倒れこんでしまいそうなほどに体が重かった。
　声は、届いただろうか。

喉が潰れてしまいそうだ。頭が霞んでしまいそうだ。このまま蹲ってしまいそうだ。
それでも、もう一度、もう一度だけ、
息を吸って、喉を絞って、叫ぼうとして、

「…………遅いわよ」

そして、声が。
温かい声が、帰ってきた。
振り返った先に立っていたのは、凛と咲き誇る、一輪の気高き花。
フラワーマスター、彼女は全ての花であり、そして何の花でもない。何にも染まらず、何にも染められず、花開く傍らにただ寄り添い、花と共に在るヒト。
私の憧れ、私の先生、そして、

――私の、好きな人。

そう、好きだから。
悔いが無いように。
悔いの無いように。
傘の陰で顔が見えない彼女へと、私はしっかりと声を張る。
「幽香さん、私、たぶん、今日、死にます。体が、そう、告げてるんです」
「……………」
「だから、今日、ここに来ました。最後に幽香さんに逢えて、私、すごく嬉しいです」
「…………」
「最後だから、きちんと言います。今までありがとうございました」
「……」
「そして、――好きでした」
「何を、言っているの」
風が、花を、頬を、傘を、薙いだ。
「何、今から死にますみたいなこと、言ってるのよ」
「幽香さん……」
「リグル、あの医者は藪医者よ、言ってることは全部嘘よ、貴女は死んだりしないわ、ええそうよリグル、貴女は妖怪、妖怪は長命、一寸の虫にも五分の魂という諺を聞いたことが無いのかしら？　貴女は数十寸あるんだから、魂だって何寸もあるでしょう？　貴女がそんな急に死んでしまうなんてこと、あるわけな「幽香さん」
捲くし立てるように放たれた幽香さんの言葉を遮る。ゆらりと揺れた傘の陰から、斜陽に当てられた幽香さんの顔が覗く。
――ああ、幽香さん。
何故、そんな表情（かお）をするのですか。
貴女には、太陽へと大きく伸びる花のような笑顔が似合うというのに、
何故、そんなに泣きそうなのですか？
「幽香さん、何故そんなに、怯えているのですか――？」
最後だから、
最期だから、
もう、残された時間は少ないから、
だから、訊いた。
「私は、今まで生きてこれたことを、嬉しく思ってますよ。誇りに思ってます。確かに死ぬのは恐いですよ？　死んだ後、どうなるのかもわかりません。それでも、今まで皆と馬鹿騒ぎして、幽香さんにいろいろ教えてもらって、幻想郷でこうして生きれたことを、私は後悔などしようがありません」
それが、私の思い。
それが、私の想い。
幽香さんの、その華奢な手を握る。
「私は」
その手は、震えていた。
「私は――」
その声は、震えていた。
「私は、リグルが、貴女がいなくなるのが、恐い――」
その顔は、泣いていた。
「貴女が本当に死んでしまうのが恐い、今まで貴女と重ねてきた時間が、全て泡沫のように消えてしまうのが恐い、この思いが、この想いが、届かなくなってしまうのが恐い――私だって、リグルが、好きなのに、ずっと、好きだったのに、好き、なのに――」
涙と共に吐露される想い。
「大丈夫ですよ、幽香さん」
その手を、その想いを、私はしっかりと握り締めた。

もう絶対に、離れないように、逸(はぐ)れないように。
冷たい手、それでも、温かい心が伝わってくる。
「幽香さんが私を思い続けてくれる限り、私は死なないですから――貴女の記憶の中で、生き続けます。だから、泣かないで下さい」
拠り所を作らず、ただ花に寄り添い、そして誰にも寄り添わなかった気高き花は、
何よりも大事なモノが失われてしまうのを、恐れていた。
それでも、
想いは残る。記憶は残る。
いつまでも、種のように。
そしてまた、花を咲かす。
輪廻の転生。自然の摂理。
彼女は冥府へと死に逝き、
彼女は現世へと残されて、
それでもまだ生き続ける。
いつかまた、時を越えて、
何処かでまた、出逢える。

そう、信じて。

暮れなずむ黄昏時、
昼と夜の境界線、
風が吹き荒び、
花が揺れる、
その中を、
二人は、
ただ、
静かに、
お互いを、
互いの生を、
互いの存在を、
生きている事を、
確かめ合うように――

翳る晩夏の太陽に照らされた影は、ただ一つに、重なり合っていた。

††

盛夏は光陰のように過ぎ去り、夏も酣、見上げた空は前に見上げた時よりも高く高く、いくら手を伸ばしても届かないほどに限りなく高かった。
夏は終わり、そして季節は巡って秋となる。
「最後の夏、か……」
ぽつりと呟いた言葉は、夏の夕暮れ空に消えていく。
リグルは幽香の膝に頭を乗せて、膝枕の状態で空を眺めていた。
幽香は何も言わず、ただリグルの緑の柔らかな髪を撫でる。
さらさらと、指は髪を梳いて、
さやさやと、風は花を撫ぜる。
赤く紅く緋い夕暮れ空は空の彼方まで染まっていて、この空がどこまでも続いているような錯覚を憶えさせる。陽は長く影も長い誰彼時(たそがれどき)。熱気を帯びつつも柔らかい赤の光が、花畑の二人を染め上げる。
「今だから言いますけど……私、幽香さんと初めて会った時、内心恐くてドキドキしてました」
「……失礼ね、これでも私だって繊細なんだから」
「それは、逢ってるうちにだんだんわかりましたよ。強くて、恐くて、でも心は繊細で、花の心が、そしてヒトの心がわかるヒト。それが、風見幽香さん」
「褒められるのは、慣れてないわ……でも、ありがとう」
「えへへ」
「なら私からも言わせてもらうわ。ありがとう、私の可愛いリグル」
「いえ、そんな感謝されるようなことをした覚えは無いですよ」
「貴女と出逢わなければ、私の日々は今まで通り、ただ花に寄り添って生きていくだけの日々だった。そこに現れた貴女は、本当に私の太陽のようだった」
「幽香さん……」
「だから、ありがとう。私の日々は、貴女のお蔭で変わったの」
「なら私だって、幽香さんにいろいろ教えてもらった日々は何物にも代えられない、楽しい日々でしたよ」
「いえ私だって……」

「いやいや私だって」
「……」
「……」
「…………フフ」
「……ップ、アハハ」
「全く、最後ぐらいは歳上の面子を持たせなさいな」
「そう言いますけど、私だってこれでも数百年は生きてるんですよ？」
「そう……私は数千年だけど？」
「すいませんでした」
「わかればよろしい」
「――幽香さん」
「何？」
「呼んで、みただけです」
「……そう」
「そんなにがっかりしないでください。それにですよ？　死んだってすぐに直に逢えます。だって、ここは幻想郷ですよ？」
「……どういうことかしら？」
「この幻想郷には彼岸もある、地獄もある、天界もある、冥界もある。だから、死んでもすぐにどこかで逢えます」
「でも、死んでるんでしょう？　――私は、生きているリグルが、いい」
「また幽香さんったら、我儘ばっかり」
「好きな人に好きなことを望んで、何が悪いのかしら？　……なんか自分で言ってて恥ずかしくなってきたわ」
「そうやって永琳さんにも我儘を言ったんでしょう？　聞きましたよ」
「……あの医者、本格的にブチのめした方が良さそうね」
「『本格的に』ってことは、発作的に何かやらかしたんですね？　永琳さんに掴みかかった挙句、部屋まで荒らした、とか」
「うっ……」
「でも、その話を聞いて、私、とても嬉しかったです。私が死ぬということに、幽香さんはその不条理に悲しんで怒ってくれた。それだけ想ってくれてたんだなって」
「そりゃあ、可愛い可愛い大事な教え子ですもの……それは永琳が、アイツが一番わかってるわよ」
「本当に永琳さんにも鈴仙さんにも迷惑ばかり掛けてばかりで……ああ、いくら謝っても、謝り足りないな」
「いいのよ。兎の方はともかく、永琳ぐらいに永く生きているとね、並大抵の迷惑なんて迷惑にならないのよ……むしろ、迷惑が人生のスパイスになるみたいに、ね」
「長く……」
「そう、永く」
「――幽香さん、いつだったか閻魔様に言われてましたよね。『貴女は長く生きすぎた』って」
「……そうね。そんなことを言われた日もあったわね……でも、今だから思えるわ、私は、長く生きすぎてしまったかもしれないと」
「でも、生きるのに理由なんて、無いですよね？」
「そう、生きるのに理由なんて、無い。そうして私は花と共に生きてきて……そして今、ようやく手に入れた『生きる理由』を失おうとしている。こんなことなら、長く生きなければよかった。そう思ってしまうぐらいに……」
「でももし幽香さんが先に死んじゃったら、私が悲しんでいたと思います」
「……そうね。でも、それは仕方の無いこと、私も貴女も妖怪とはいえ、一つの生物。いつかは死ぬモノなのだから」
「そして必ずどちらかが取り残される……」
「それでも、残されても、記憶は残る、思い出は残る。死によって全てが消えてしまうわけではない。私の心には、貴女がいるのだから」
「幽香さん……」
「それを教えてくれたのは、リグル、貴女でしょう？　――だから、ご褒美」
「え、あ、――――ん」
「――――ほら、まだ、唇、温かい」
「あ、あぅあぅ、ゆ、幽香さん……」
「何かしら？」
「や、呼んで、みただけです」
「そう」
「……やっぱり、幽香さんには笑顔が似合います」
「だって、最後に見た花が萎れていたら悲し

いでしょう？　花はね、枯れる時に泣けばいいのよ」
「でも、泣いている幽香さんも見たいなんて思うのは、ダメですか？」
「……それは、ダメよ」
「好きな人に好きなことを望んだら、ダメですか？」
「……墓穴掘ったわ」
「ふふふ……本当に、幽香さんは、可愛いです」
「ほ、褒めても何も出ないわよ？　それに、私だって、今、本当は、泣きたくて、泣きたくて、どうしようもないのに――」
「もう、幽香さん……泣かないでください。幽香さんには泣き顔は似合い……ゴホッ、カ、ハッ――」
「リグルッ!?」
「いえ、ちょっと、咳が出た、だけですから……、幽香さん、手、握って下さい」
「……これで、安心できる？」
「はい、安心します……ああ、そろそろ日が、暮れますね。世界が、暗くなっていく」
「まだ、よ。まだ日は沈まないわ――」
「幽、香さん、ああ、日が沈んで、もう真っ暗だ」
「大丈夫、私はここにいる」
　命の灯火が、風に吹かれて静かに消え逝く。
　リグルが幽香を見て、幽香がリグルを見た。
　幽香がリグルを撫で、リグルが幽香に笑む。
　それは、彼女の精一杯の幸福の笑顔だった。
　まるで、今にも、死んでしまいそうな――。
「幽香、さん」
「何、かしら？」

「　　、　　　――」

　そしてリグルは、永遠の眠りに就くように、静かに目を閉じた。
「――リグ、ル？」
　返事は、無い。
　それでも、眠るように目を閉じたリグルの顔は、幸せそうに微笑んでいた。
　幽香はリグルを抱き締める。止まった心臓、止まった呼吸、止まった生命。それでも、微かに残る、彼女の体温、彼女の笑顔、彼女の、温もり。
　その温もりを、逃がさないように。
　幽香は、ぎゅっと、しっかりと抱き締めた。
　抱き締めた体は、怖ろしいほどに軽かった。
　こんなにも、命というものは軽かったのか。
　そう、思えるほどに。
　そしてもう、彼女の笑顔は、永遠に見ることができない。
　彼女との思い出が、走馬灯のように駆け巡る。
　ふとした邂逅。彼女の笑顔。始まる日々。教え、教えられ、時には仲違いした日もあった。それでも、仲直りして、そして笑いあった。楽しそうな笑顔。絶対に忘れない、太陽のような、笑顔。
　涙が、止まらなかった。
　それでも、
　想いは残る。記憶は残る。
　いつまでも、種のように。
　そしてまた、花を咲かす。
　いつかまた、時間を経て、
　何処かでまた、出逢える。
　そう、信じて。
　黄昏の橙に包まれた向日葵畑に、一人の嗚咽だけが、いつまでも響いていた。
　蛍火は幻想のように儚く消え逝き、
　そして、斜陽に散り逝く向日葵が、夏の終わりを告げていた。

（了）

〈作者コメント〉
　生きている者はいつか死ぬ、それは人間も然り、妖怪も然り、そんな中で悔いの無いように生きることが出来る者は少なく、それでも悔いの無いように生きた彼女は泡沫に消ゆ、夏の陽が翳る花畑の中心、静かに佇む蛍の墓（Ｂｕｓｔｕｍ　Ｌｕｃｃｉｏｌａｅ）

に捧ぐは一輪の大輪、地上の恒星のような向日葵の花。花言葉は、光輝。

初めまして、西遊と申します。そんなわけで初夏・仲夏・晩夏の三部作と相成ったわけですが、いかがだったでしょうか？　兎にも角にも、小崎様（神）と月刊ナイトバグとその読者の皆様に、深く深い深謝を。翼よ、あれが蛍の灯だ。リグルマジ可愛い。それではまた、いつかどこかで逢う日まで。

地位向上を目指して ‐黒と鳥‐

著者：如月翔

「そうだ、お礼をしなくちゃね」
「急にどうしたの？　お礼されるようなことをした覚えはないのだけど」
「私の変わりにリグルを案内してくれたじゃない」
「あれ位別にいいわよ、たまたま知っていたからやっただけで・・・お礼されるようなことじゃないわ」
「じゃあ美味しいお茶とお菓子、それとこの人形のお礼にするわ」
「・・・お礼するのは構わないけど、別に気にしなくてもいいのよ？」
「私がしたいだけだから、素直に聞いて貰えると嬉しいわ」
「判ったわ、ところで何をしてくれるのかしら？」
「今度美味しい食べ物を御馳走するよ」
「それは楽しみね・・・」
「どうしたの？」
「・・・リグルも大変ね、巻き込まれやすいの？　それとも流されやすいのかしら？」
「よぉアリス、お客さんを連れてきたぜ」
「・・・両方だと思うよ？」
「苦労しそうだわ」
　・・・何の話をしていたのか判らないけど、アリスさんとルーミアが私を見る。
　私って苦労しそうなの？
「いらっしゃい魔理沙リグルもお帰りなさい、・・・目当ての物は手に入ったようね」
「アリスさんただいま、おかげで買えました」
「それは良かったわ、あの子の人形は出来てるけど・・・どうする？」
　そう言って、魔理沙と会話しているルーミアを見る。
　・・・本当に素早い、何時の間に移動しているのか。
「もう少し・・・お邪魔してもいいですか？」
　人形が完成しているなら、帰ってもいいけど。
　来て直ぐ帰るというのは少し勿体ない気も、失礼なような気もする。
　外は少し陽が傾いてきて寒くなり始めたけどもう少しだけ・・・。
「別に構わないわ、あの子もまだ帰りそうにないし」
　今日は何時もより少し冷えるし、ちょっと熱いかもしれないけど。
　そう言って人形が紅茶とクッキー・・・？と言ったか堅くて甘いお菓子を運んでくる。
　・・・魔法使いは何かしら器用なのだろうか？
「有難うございます」
「殺虫剤はこれで全部なの？」
「紅魔館の誰かが買って行ったみたいですけど、今お店に有るもの全部売ってもらいました」
「欲しい物が買えて良かったわね、それで紅魔館にも行くのかしら？」
「行こうとは思ってますけど・・・」
　紅魔館は香霖堂と違って、道も判るし行こ

うと思えばすぐに行ける。
　でも私は迷っていた・・・、買って行ったということは必要としているからだろうし。
　ロケットを作って月まで行くような吸血鬼達を私は説得できるのだろうか。
「歯切れわるいわね、どうかしたの?」
「紅魔館の人達に私の話聞いてもらえるのか・・・」
「聞いて動きそうなのもいるけど・・・聞きそうにないのや、聞いても動かなそうなのは居るわね」
「聞いてもらえるなら・・・、頑張ってみます」
　そうは言ってもあまり自信はない、紅魔館の誰が買ったのか判らないし。
　正直に言うと紅魔館の人達を私は良く知らない。
「誰が買ったのか、誰が欲しがっているのかも判らないし、とりあえず行ってみたら?」
「それもそうですね・・・行ってみます」
「また上手くいくといいわね」
「リグル、暗くなってきたしそろそろ帰ろう?」
　外を見ると、既に真っ暗になっていた。
　少しずつだけど日に日に寒く、夜の時間が長くなってきた・・・ような気がする。
　陽が暮れたからかルーミアが少し嬉しそうだ。
「うんいいよ、・・・アリスさん色々と有難うございました、また来てもいいですか?」
「どういたしまして、また来るならお茶とお菓子くらいなら用意するわ」
「ありがとうございました」
「またねー」
「あの妖精達といいあいつらといい・・・、随分懐かれてるな」
「・・・何?羨ましいのかしら?」
「んな訳あるか」

「ミスティアー、こんばんわ」
「ミスティアー、八目鰻頂戴ー」
「いらっしゃーい今席用意するからちょっとーって、ルーミアとリグルじゃない」
　誰か来ていたのか後片付けをしている。
　自分が使った訳でもない物を片付けたり、掃除する屋台は大変だな・・・。
　って私も片付けないまま、香霖堂やアリスさんの家を出たじゃないか。
　今度からは片付けたほうがいいかな・・・。
「誰か来てたの?お客さん?」
　ルーミアと手伝いながら聞いてみる、雪が積もるほど寒いという訳ではないけど、屋台の明りに照らされて息が白く見える。
　ミスティアにはわるいけど、こんな時間に来るなんて物好きだと思う。
「うーんとね、二人組の人間だよ?こんな寒いのに物好きだよねー」
「・・・自分で言ったら駄目だと思うよ」
「そう? まぁいいじゃない、はい焼けたよ」
「ありがとー、こっちも終わったよー」
「二人ともありがとね・・・ところでリグルそのダンボール何?」
「香霖堂で買ってきた殺虫剤だよ」
　蓋を開けて中身を取り出しながら言う。
「え? 今日行ってきたの?昨日言ったばかりなのに・・・」
「うん、今日行ってきたんだ」
「早いね・・・森で迷子にならなかったの?」
「リグルと行ったけど迷子になったよ(モグモグ)」
「でもアリスさんが地図渡してくれたし、魔理沙が案内してくれて行けたよ」
「へぇーあの人形遣いと白黒がねー」
「香霖堂の店主も結構良い人だったよ」
「そうなの? 私も行ってみようかな?」
「何か欲しい物でもあるの?」
「んー特にないけど、外の面白そうな道具あるかもしれないじゃない?」
　ミスティアが何か面白そう物あった?と聞いてくる。
　面白い物・・・何かあったかな?殺虫剤の事しか頭に無くて他の物見てなかった。
　足元に散らばっていた良く判らない物しか覚えていない・・・。
「・・・ごめん覚えていない」
「そっかー残念だなー」
「でも何だか良く判らない物ならたくさんあったよ」
「良く判らない物かー、今度行ってみようかな?」

「(モグモグ)でもリグル、今日はちょっと疲れる一日だったねー」
「そう？　殺虫剤も無事手に入ったし、結構楽しかったらそうでもないよ」
「楽しかったの？　いいなぁー私も行けば良かった、それで紅魔館にも行くの？」
「行くつもりだよ、明日直ぐ行くなんてことはないけどね」
「あ・・・」
「どうしたの？」
「言うのを忘れてごめんね？もう焼けるのがないから、これが最後だよ」
「じゃあ今日はもう終わり？」
「そうだねーお酒ならまだあるけど・・・」
「食べ物無しで、お酒呑むのは物足りないしねー」
「そうだね食べ終わったら、片付けようか」
　色々合った長い一日が終わる。
　普段なら会わないだろう人達に会って話をして、今日あった出来事は良い経験になったかもしれない。
　アリスさんと魔理沙が良い人だっていうことが判ったし、初めて会った店主も良い人だった。
　また今度会いに行こうと思える人に出会えて良かった。

(続く)

〈作者コメント〉
　今回は前回よりも短めで、ちょっと休憩をイメージしながらやってみました。どう考えてもサブタイ付けたの失敗ですね、色と名前の縛りは予想以上に難しい・・・。次回は紅魔メンバーとの絡みですが、今のところ何も問題ありません、また楽しく作れそうです

I.B.椛(いぬばしり)は白狼天狗なりや？
羅外
おはようリグル！
ひぇぇ
椛!? 何その脚
わおーん
ああ 成長期なんです
そうなの!? そういう問題なの!?
この形態だと下着がはけなくて恥ずかしいんですよね……
イヤン
パタパタ
いや 思いっきりしっぽパタパタいってますが

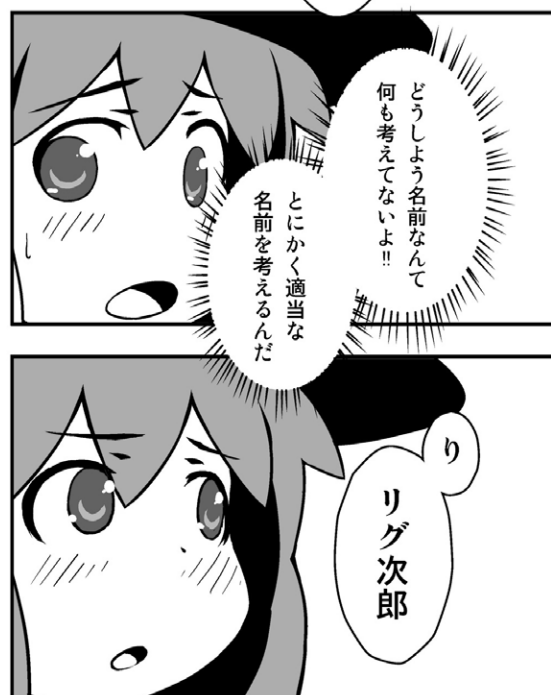
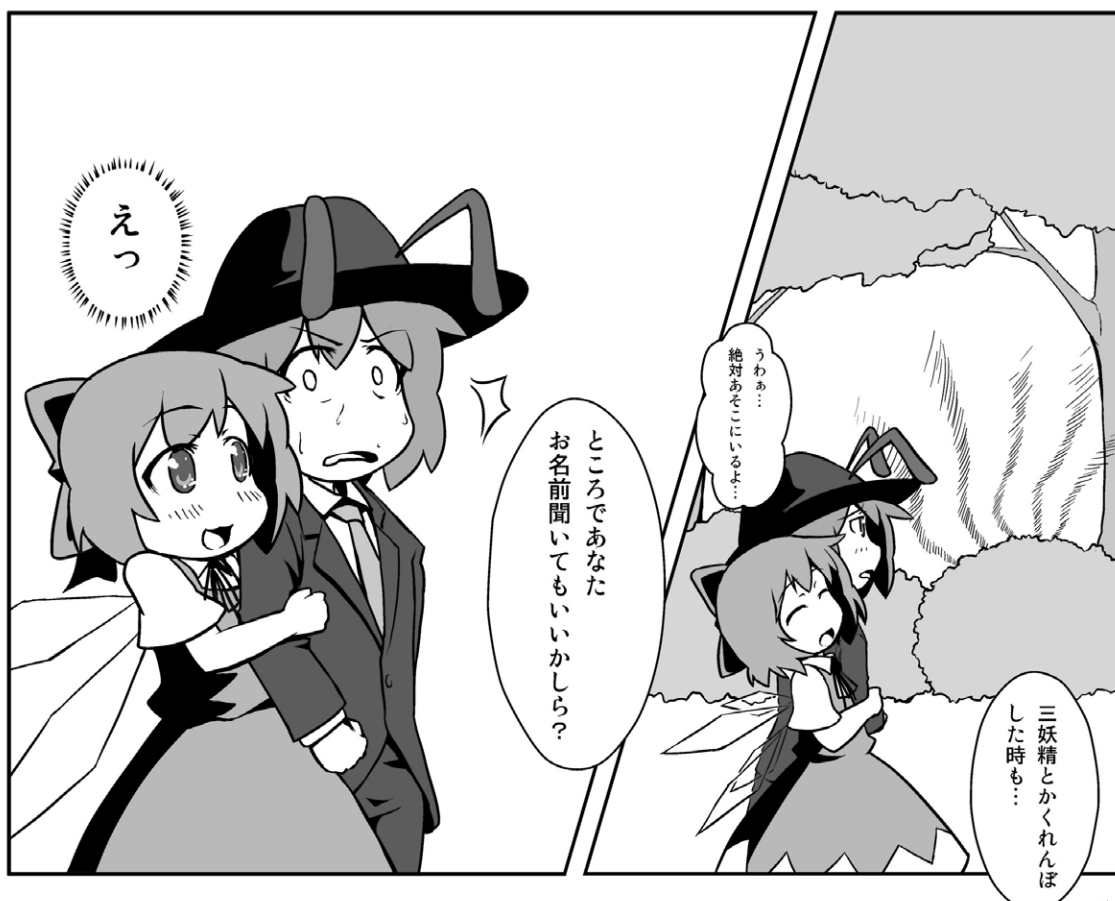
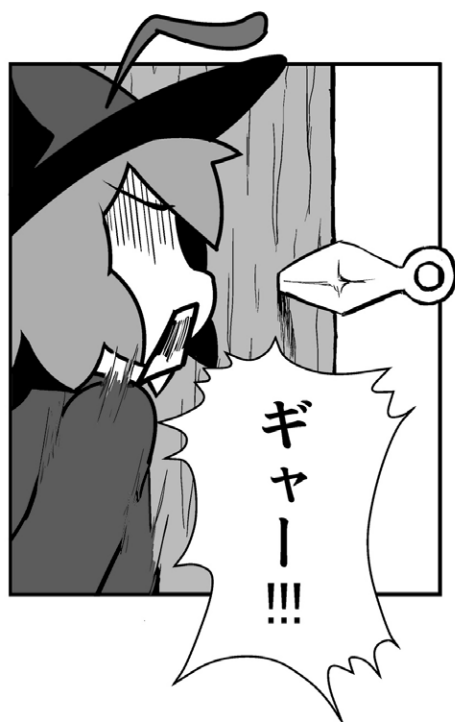
うわぁ…
絶対あそこにいるよ…
三妖精とかくれんぼ
した時も…
ところであなた
お名前聞いてもいいかしら？
えっ
どうしよう名前なんて
何も考えてないよ!!
とにかく適当な
名前を考えるんだ
り
リグ次郎
ぶっ!!
ガサッ
ガサッ
笑いやがった

アハハハハ
リグ次郎だって！
リグ次郎！
笑うなよーせっかく
手伝ってあげてるのに！

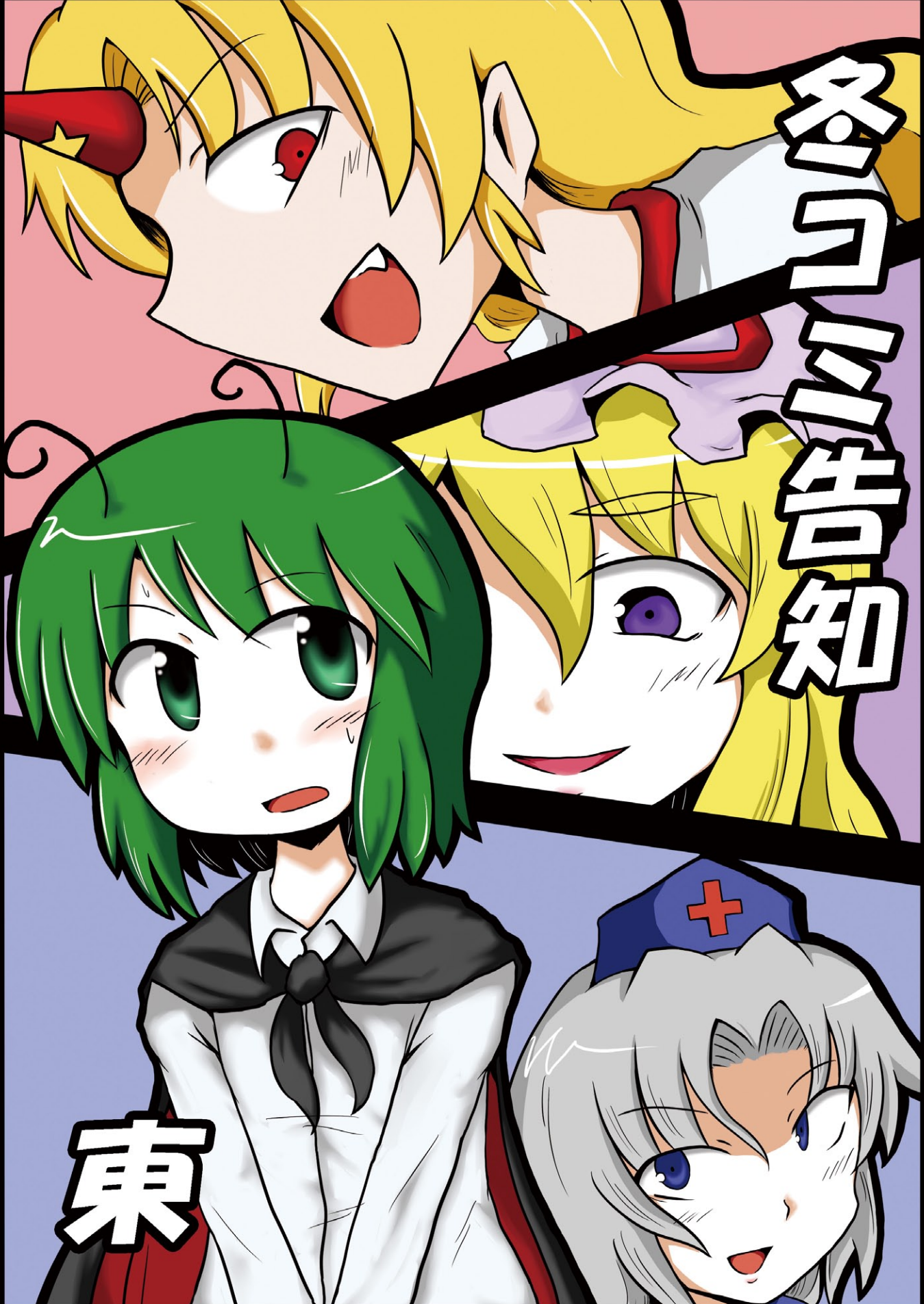
この計画チルノに
ばらしちゃ…

まったく…
うん？
待てよ…
そうだな

わかった！
わかったから！
言わないよ！
言わないから
それしまって！

ギャー!!!

『 ベッドのうえのふたり 』　黒ストスキー

指を絡ませあうってのはそれだけでエロスを感じるわけで

冬コミ告知
東

リグル好きによくあること（コミケ編）

年末といえば…

新刊の内容とは一切関係ない4コマ劇場。

描いた人 東

はいどうも東です。いつもの宣伝ですよ！

正月前の一大イベント、冬コミにサークル参加します
配置は、水曜日東地区フ10b「海亀」

【新刊】
りぐるきゅんDX　40p　500円（予価）

内容は、月の宴2で配布したりぐるきゅんと
地獄極楽メルトダウンで配布したりぐるきゅんEXに
新たに八雲紫メインの話を加えたコピー本の再録中心の本
となってますよ。あまりにもリグル本です
でも実際は紫、永淋、勇儀がメインで、リグルはそんなに
でてこないかも…

あと今回はパチュリグ缶バッチセットも作ってみました
↓のがサンプルです。二つセットで300円なり

いやぁ冬コミ前なので案の定正月特集には参加
できなかったですが、冬コミ参加される方いたら
ビッグサイトで僕と握手！！

また来年も月刊ナイトバグと共に素晴らしいリグルライフ
をおくれたらいいですねぇ～
それでは皆さんよいお年を！

蛍を呼ぶ甘露の罠・前編

著者：銅おりは

「「「すとーかー？」」」
「あ、いや、そうって決まったわけじゃなくて、そうなのかなーって思っただけよ。あくまでね？」
　話を切り出したとたん、その場に居た全員に声を揃えて聞き返され、リグルは困った顔で頬をかく。
　ここは湖畔に程近い森の広場。紅魔館とは湖を挟んで対岸のこの地域は、吸血鬼の勢力圏からはやや遠く、かといって魔法の森の魔法使いが出没するキノコの群生地というわけでもない。結果、ここにはそれほど力の強くない妖怪や妖精たちが遊び場のように群れ集うようになっている。
　しかし、いつもの面々の暢気な雰囲気とは対照的に、リグルはずいぶんと憔悴しているようだった。
「最近、家に見たことない包みが置いてあったりしてさ。気になってしょうがないの。誰からかもわからないし。一応聞くけど、みんなじゃないんでしょ？」
「だって。ルーミア知ってる？」
「全然？」
　闇妖に倣うようにこくこく頷く一同。
「包みって、中身は？」
「見てない。なんか気持ち悪いもん。……それに、ずーっと誰かに見られてるみたいな感じもするんだよね」
「ええっ……怖いねっ」
　本当にストーカーなのかな、と応じる大妖精を、チルノは笑い飛ばした。
「まっさかぁ。大ちゃんそれはないない。リグルに限って」
「な、なによそれ！　わっ、私だってねえ、ファンのひとりやふたりくらいっ」
「熱心なファンだねー」
　こぶしを握って立ち上がり、触覚をぴこんと立てて頬を膨らませるリグルだったが、身構えたチルノと応酬を始めるでもなく、すぐに空気の抜けた風船のようにすとんと腰を下ろしてしまう。そのまま抱えた膝の上に顎を乗せ、背中を丸めて深い溜息。
「……はあ。なんかもう疲れた。普通に考えて気にしすぎなんだろうけど、いちど気になったらどんどんそう思えてきちゃってっ……」
「お疲れだねー」
　俯いたリグルの頭を、よしよしと撫でてやるルーミア。思ったより深刻そうなリグルの様子に、さすがにチルノもそれ以上の軽口は自重する。
「しょうがないなリグルは。……なんか心当たりないの？　そいつに」
「あったらこんなに困ってないってば。それに本当に居るのかどうかもわかんないんだから」
「……でもさー」
　何事かを言いかけたチルノだが、そこであれ？　と声を上げた。きょろきょろと左右を見回して、
「ねえ、そういえばみすちーは？」
「あれ？」
　ついさっきまで一緒にいたはずの彼女の姿は、いつの間にか話の輪から消えている。
「さっきまでいたよ。帰っちゃったのかなー？」
「でも、それなら一言くらいあっても……」
「ね、ねえ、あれ！」

皆が夜雀の姿を捜す中、リグルが森の一角を指さす。
広場から少し離れた、樹齢にして数百年を数えると思われる苔むした老木。その節くれた枝の先に、白く禍々しい粘ついた糸が幾重にも絡み付いている。
ミスティアはまるで百舌の早贄のように、その枝先に上下逆さまに括りつけられていた。
「……みすちー？」
一本一本は髪よりも細い糸が何本も束ねられて、執拗なほど念入りに、哀れな夜雀の肢体を拘束している。
不自然な角度で身体を固定された彼女の服の裾は無惨に引き裂かれ、むき出しの太腿や二の腕に深々と食い込む糸がひどく痛々しい。
四肢はおろか、翼の自由さえも奪われて宙吊りにされ、無惨な姿となった彼女は、うっすらと瞳を開け、ぼんやりとした瞳であらぬ方を見つめていた。
「んぅ……ッ」
糸の束に割り裂かれて塞がれた唇の隙間から、苦しげに息をこぼし――ミスティアはじっとりと汗の浮いたうなじを震わせ、わずかな身じろぎを繰り返す。
あまりにも無惨な姿の友人を前に、チルノたちはしばし言葉を失い――
「なんだ、みすちーこんなとこにいたじゃん」
「なーんだ」
「いや待ちなさいっ！？」
あまりといえばあまりな対応に、ミスティアは口を塞ぐ糸をぶちぶちと噛み千切って全力で突っ込んだ。宙吊り蓑虫状態のまま、全身を揺すって抗議の声をあげる。
「こんな目に遭ってる友達に対して、もうちょっと言う事ないのっ！？」
「だってほら、いまさら誰に食べられたのって話だし」
「定番ネタに頼りすぎるのはどうかと思うなー？」
「うん。新鮮味に欠けると思うよみすちー」
「うわぁーんっ！？」
チルノにまで言われてしまえば、もはや夜雀に立つ瀬なし。ミスティアは蓑虫状態のままぷらぷら揺れながら滂沱の涙を流す。
「と、とにかくこれ外してっ！　早く下ろしてよぉっ」
「もー、しょうがないなぁ。ルーミア、そっち持って」
「了解なのかー」
絡み合った粘つく糸を引き剥がすのは意外に困難を極め、ミスティアの救出にはかなりの時間を要した。
「あう、べとべと……」
ようやく解放され、ぺたんと地面にお尻をついて、半泣きで顔に粘りつく糸をぬぐうミスティア。少し赤くなった鼻の先を擦ってすん、と啜り上げる。なんとも艶っぽいその仕草に、その場の皆がそれにしてもこの子食べられるのが似合うなぁ、と思ったりした。
リグルが差し出したタオルでミスティアの顔をぬぐってやるその隣で、チルノはむぅ、と顔をしかめる。
「なにやってんのさみすちー。リグルがせっかくオンナになれるかの瀬戸際だってのに」
「いや私そんな話してないよ！？」
思わず抗議を入れるリグルだが、それは見事にスルーされる。
「わかんないわよ。さっきいきなり目の前が真っ白になって、口も塞がれて、身体が動かなくなったと思ったらそのまま引きずり込まれるみたいに――ってちょっと！　みんなで『またかよ』みたいな顔しないでくれる！？」
「でもみすちーだし、ほら」
「だから鳥頭とか三歩忘却とかそういうんじゃなくてねっ！　っていうかチルノにそーゆう顔されるのなんか妙に腹が立つんだけどっ」
「ああほらみすちー、動くと上手く拭けないってば」
リグルに言われ、しぶしぶ逆立てていた羽根を下ろすミスティア。
彼女を絡め採っていた粘つく糸を指先に摘み上げ、大妖精とルーミアも首をひねる。
「なんだろうね、これ。トリモチじゃないみたいだし……人間の罠？」
「あんまり美味しそうじゃないねー」
「ほんとにみすちーは情けないなぁ。そんなんじゃまた食べられちゃうよ？」

「食べられてないってばっ」
「……ちょっと見せて」
言い合いを始めたふたりをよそに、リグルは神妙な面持ちでその糸をじっと覗き込んだ。
「どしたの、リグル」
「これって……」
彼女が心当たりを口にしかけた、その時だった。
「あ、あのっ！」
背後からの声に、一同が揃って振り向けば、そこには黒と褐色の服を着て、金髪を頭の後ろで結わえた少女の姿があった。その背後ではもう一人、桶から顔を覗かせるおさげ髪の少女が恐る恐る様子を窺っている。
「な、何よあんたたち」
「……ええとねぇ、その、どこから話せばいいのかな……。あのね？　私たち、地底から来たんだけど――」
「地底!?」
地底の妖怪――それがどういったことを意味しているのかはチルノでも知っていることだった。妖怪と人間が共存するこの幻想郷で、様々な理由でそのコミュニティからも拒絶された妖怪たち。
その関係は、決して友好的と呼べるものではない。
「まさか、みすちーにこれやったの、あんた?!」
「え、えーっと……」

口篭る少女のその反応が、何よりも雄弁に答えを示していた。
たちまち高まる緊張のなか、チルノはいち早くスペルカードを構え、皆を庇うようにして前に立つ。
「よくもみすちーを！　勝負なら相手になるわよっ！」
「ちょ!?　ち、違うよ、そうじゃなくてね!?」
「もんどうむようっ！　みすちーの仇だぁっ」
「チルノちゃん待って！　この子、ひょっとして――」
スペルカードを宣言しかけた氷精の袖を、大妖精がぎゅっと引っ張って押しとどめる。
「なにすんのさ大ちゃん、あたいは今……」
「ま、待って！　間違えちゃったのは謝るからっ！　誤解なんだってば！」
拳を握り締め、いまにも泣き出しきそうになるのを懸命に堪えながらの少女に、敵意らしいものは見られなかった。深く頭を下げて、彼女は縋るように声を絞り出す。
「だからお願い、話を聞いてっ」
「……話？」
「チルノちゃん、聞いてあげよ？　みんなも」
「…………わかったよ」
大妖精に諭されて、チルノは不満げながらもスペルカードを引っ込める。
「本当にごめんなさいっ。ちょっとその、巣にかかった！　と思ったら急にテンション上がっちゃって……」
「巣？」
「あ。自己紹介もまだだったね。私は土蜘蛛の黒谷ヤマメ。こっちはキスメ」
彼女の背後で釣瓶落としがちょこんと頭を下げる。
そうしてヤマメと名乗った金髪の少女は、顔を上げ、じっ、とリグルを見つめた。
「それで、そ、その子に……大事なお話があるのっ」
「へ？　私？」
ここで自分のことが出てくるとは思っていなかったリグルは、急に話を振られてまばたきをひとつ。
「だ、大事な話なの……お願い」
「え、あ、まあ、いいけど……」
ヤマメは隣のキスメと視線を交わし、決意の表情でリグルの正面に進み出る。右足と右手が一緒に出るぎこちない歩き方で、いまにもぎぎぎぎ、と錆びついた音まで聞こえてきそうだった。
前髪に隠れていてもはっきりわかるほどに、その頬は紅く染まっている。
「えっと？　なに？」
「そ、その、あのっ」
尋ねるリグルに対し、言葉がつっかえた様子であうあうと呻くヤマメ。そんな彼女に後ろから応援が飛ぶ。
「ヤマメ、頑張ってっ」
「……うんっ」

キスメに促され、力強く前を見た彼女は、そのまま背後に隠し持っていた包みをリグルにぐっと突き出して、
「ず、ずっと前から好きでしたっ。わたしとっ」
　リボンをかけたプレゼントと一緒に、一言――
「わ、わたっ、私に食べられてくださいっ！」

……とりあえず、最悪の告白でした。

◆◆◆

　一時は混乱を極めた場もとりあえず解散となり、広場に残されたのはリグルとヤマメのふたりきり。湖畔の朽ちた丸太の上に並んで腰かける二人の間を、なんとも言い難い沈黙が埋める。
　ちらり、と横目で俯いたままのヤマメを窺っては、目が合いそうになって慌てて顔をそらすことの繰り返しをしながら、リグルは自問する。
（えっと、なんでこんな――どうしてこうなった？）
　降って湧いた告白イベントに、すっかりオーバーフローしてしまった思考能力は先程から空転を続け、思うように相手の姿すら見ることもできない。
（好き？　いやその、それってつまりその、告白？　……ルーミアじゃあるまいしまさか食べ物の好き嫌いってことじゃないよね？　よね？　ってことはつまり、つまり、その……ええええええ！？）
　時間とともに落ち着くどころかますます混乱の度合いを増してゆく頭の中。リグルは膨らみかけた様々な想像を追い払うようにぶんぶんとかぶりを振った。
（って、いつまでもこんなんじゃしょうがないわよっ）
　とうとう緊張に耐えられなくなったリグルは、半ば自棄になって口を開く。
「あ、あのっ」
　意図せず上げた声が見事に重なり、ぶつかった視線がリグルの顔の温度をかぁーっ、と上げてゆく。同じように真っ赤になった顔を伏せるヤマメの仕草に、リグルはますます動揺してしまった。
　とにかく何か言わなければ。そう焦りながら無理矢理に言葉を継ぐ。
「え、ええとっ」
　高鳴る鼓動を抑えながら、あさってを向いて続けた声は面白いくらい裏返っていた。
「え、ええと、その、つまり――わ、私と、付き合って、って話だけど」
「う、うんっ」
「……ね、念のため聞かせて。あの、まさかとは思うけど、私のこと男だとか思ってるとか、そういう……？」
「そ、そうなのっ！？」
「違うよ！？　断じてオトコノコ違うからね！」
　慌てて否定するリグルに、ヤマメはそっかあ、と残念そうな、安心したような不思議な表情でそっと胸を撫で下ろす。
「……あー、ビックリしたよぉ。そりゃね、私も女の子同士でヘンかなって……ちょっとは思ってたけど」
「そ、そうかな？」
「……でも、違う。うん。違うみたい。そういうのじゃないよ。きっとあなたはあなただから。私は、リグルがリグルだから、好きになったんだと思うし」
「そ、そう、なんだ」
　堪え切れなくなった視線を膝の上のプレゼントの包みに落として、リグルは想いを巡らせる。
　なんでも、これまでもヤマメは何度も告白のためリグルの家を訪れていたらしい。しかし、いざ会おうとなるとどうしても気後れし、きっかけがつかめないまま、いつもその場にプレゼントだけを残して帰ってしまっていたのだという。
　どうして話しかけてこなかったのかと言えば、ヤマメたち地底の妖怪は嫌われ者だからだという理由らしい。
　けれど、こうして話していれば、ヤマメはごくごく普通の妖怪だった。確かに少しばか

り特殊な能力を持っているが、そんなのはリグルも彼女の友人たちだって似たようなものだ。
　リグルは不思議に思い、それを口にする。
「あのさ、ヤマメ。……気分悪くしたらごめんね。正直、まだその、好きって言われてもどうしていいか良くわからないんだけど……」
「うん」
　こくり、と固い息を飲み込み、リグルはヤマメを見る。
「なんで、私を？」
「……一目惚れ」
「へ？」
　ぽかんと口を明けたリグルに、ヤマメは胸の前でもじもじと指を絡めあわせる。
「こないだから、地底と地上の交流が始まったじゃない。それで、地上との連絡孔の増掘と拡張が決まったのよ。私がそれの担当になっててね。それで――」
　地上と地下の偉い妖怪同士が、山の神様の仲介で巫女と一緒にそんな話し合いを持ったという噂は、リグルも耳にしたことがあった。
「何年ぶりになるかなぁ、空を見たの。ずっと地底にいたからねぇ。折角だから神社にでも挨拶に行こうって思って……それで、リグルが飛んでるのを見たんだよ。
　遠目だったし、その時はリグルは気付いてなかったみたいなんだけど」
「そう、なんだ」
「うん。リグルの羽根、……とっても綺麗だった」
　青い大空――もう記憶にもぼんやりとしか残っていなかった地上の空に、まるで硝子細工のような美しく光る透明な羽を拡げて飛ぶ、少女の姿。
　地底に隠れ潜んだ土蜘蛛が、ずっと昔に失い忘れていたもの。それをリグルが思い出させてくれたのだ、と。
　そう、ヤマメは言う。
「う……あ、その、ありがと……」
　こんなにもまっすぐな好意をぶつけられて、リグルはますます言葉に詰まってしまう。
　自分にはないもの、足りないものを素直に素敵だ、と言える。それはきっとすごい事なんじゃないだろうかとリグルは思った。
　まして、蜘蛛は蟲の天敵でもあり、蛍よりもよっぽど強力な妖怪として有名だ。人を襲ったり、美しい女性の姿を取ったり、時には鬼と呼ばれて英雄と呼ばれるような人間と太刀回りを演じることだってある。
　事実、リグルの目にもヤマメはとても、可愛らしく素敵な女の子に見えた。
　そんなヤマメが、自分のことをす、好き、だなんて――
（あああ、落ち着け私っ！？）
　好き、という単語を思い浮かべた瞬間、ぼっと頭が沸騰を始めそうになる。ぎゅっと目を閉じ、リグルは強引に話題を変えた。
「えっと、そ、その服、可愛いね」
「あ、うん、ありがと。これ、お気に入りなんだ」
　頑張って作ったから、とはにかむヤマメ。
「え？　それ、自分で作ってるのっ？」
　リグルの服は使役する天蚕たちに時間を掛けて編ませたものだが（そのため下着まで１００％ピュアシルク、天蚕糸の特製なのだ）、ヤマメの衣装は彼女自身が妖力を籠めて編んだものだという。
「うん、ほら」
　ヤマメがちょいと持ち上げた袖を軽く引っ張ると、布地はさらりと極細の糸束に溶け崩れてゆく。むき出しになった白い腕で、ヤマメは糸の端をはい、とリグルに手渡した。蜘蛛の糸は蚕のそれよりも強靭で、なおかつ肌触りでも負けてはいない。
「すごい……」
　リグルが糸を返すと、ヤマメは再び目にもとまらぬ早業で、服の袖部分を編み直してゆく。ものの数秒で元に戻った服に、リグルは再度感嘆の吐息をこぼした。
「お、大袈裟だねぇ。別にこれくらい、どーってことないよ。それに、あんまり自慢できるような事でもないからさ」
「どうして？」
「や、ははは。だってほら、私の住んでるとこ地底じゃない？　みんなに嫌われて地底に逃げ込んだ妖怪がさ、あんまり浮かれ気分で

お洒落とかお化粧とか、そういうのってどうかなーって思うわけさ」
「そんなことないよ。とっても似合うと思う」
「ぅ、あ。……ありがと」
　それは、リグルの心からの言葉で。
　今度はヤマメが耳まで赤くなる番だった。

◆◆◆

　さて。そんな具合に初々しい二人を、近くの茂みの中から窺う怪しい影がいつつ。
「逢引なのかー」
「ねぇ、このあとどうなるのかなっ」
「ああもうじれったいわねっ！　何やってんのさリグル、早くいくとこまでいっちゃえばいいじゃない！」
「ねえチルノちゃん、意味分かって言ってる……？」
　無論ながら、友達思いの彼女たちが大人しく場を譲るわけもなく。物陰から応援を送り続ける一同のテンションは激しく高い。
　特にかしましい3人から少し離れて取り残された大妖精がちらりと脇を見ると、桶から半分顔を覗かせてはらはらと成り行きを見守っているキスメと視線が合った。
　どことなくシンパシーを感じる（髪の色も含めて）二人は、そろって苦笑する。
　ヤマメとリグル、湖の側に並ぶ二人の背中は、最初の頃に比べてだいぶ近くなっていた。が、寄り添うには至らず、わずかに離れたその小さな隙間がどうにももどかしい。遠目にもわかるほど落ち着かない様子のリグルは、すっかり会話の主導権も握られっぱなしのようだ。
「なんていうか、最初はそう見えなかったけどヤマメって結構お姉さんっぽい感じだね？
　あの服可愛いなぁ」
「見た目あんまり変わらないけど、不思議だねー」
「……うん、きっとあの子、リグルにはお似合いよ」
　チルノが、そう言って小さく笑った、その時。
　ふわり、どこからともなく花の香りがあたりに満ちる。
　……それは本来、何をおいても警戒せねばならない危機の先触れのはずだった。
　しかし。降って湧いた友達の恋バナに夢中になっていたチルノ達は、迂闊にも全員、それがなんの予兆なのかをすっかり忘れていた。
「――へえ、誰が誰とお似合いなのかしら」
　靴音とともに、じっとリグルとヤマメの様子を窺うチルノの背中に、声がかかる。
「決まってるじゃない、さっきあの子がリグルに告白したの。そんでいま初デート中ってわけなのさ！　あたいたちも応援してあげてるんだから邪魔しないでっ」
「……それで？」
　ざわり、と森の木々が梢を震わせる。いつの間にか自分以外の返答がなくなっていることに、チルノはまだ気付かない。
「ああもうっ。だからリグルが心配でこうやって見てるんじゃない。馬鹿ねっ」
「……そう」
「ぐえっ？！」
　いきなり背後から凄まじい力で頭を掴まれ、チルノは悲鳴を上げた。ゆらり、と動いた影は、そのまま容赦なく氷精を宙に持ち上げる。
「……げ！？」
　反射的に振り向いて、そのまま驚愕に固まるチルノの最後の叫びは、あっさりと途切れた。

（続く）

【註】
　本作は十一月の大⑨州東方祭にて頒布した『地と星に逢う金蘭の契り』に収録した作品の加筆修正版となります。

〈作者コメント〉
　多くの方にははじめまして。
　拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

ずっと一緒に　～－2～

著者：壁々

「…いいわね、温泉。やっぱり」
「今更だな、霊夢。私は自分の家にあるからそこまでありがたみはないが。」
「室内では雪見も月見もできないでしょ？」
「そうだな、そこはありがたいところだ。」
冬も深まり、白銀の景色が広がる日々。年明けそうそうに怨霊とともに湧き出た温泉も、今ではただの温泉である。か細い月明かりの中見上げる雪は星が降るようにも見え、霊夢たちはゆったりとそれを眺めていた。
「そういえば、霊夢。最近里で物盗りが流行ってるらしいぜ？」
「…へぇ。まぁ冬だし、切羽詰まった人間は何するかわからないからねぇ。」
「お前じゃないのか？」
「あんたじゃないの？」
「よし上等だ、表出な。」
「寒いから嫌。」
「それもそうだな。」

「…のぼせそう」
「寒いって言ってから3分もたってないぜ。」
「あんたも顔赤いけど？」
「…表出るか。」
「そうね…。」

「慧音に愚痴られたよ。そのうちお前ん所に物盗り退治の相談に来るんじゃないか？」
「私は警備員でも用心棒でもないんだけど。」
温泉からあがって、神社への帰り道、魔理沙は再び話題を戻した。一方の霊夢は興味がなさそうである。
「なんだよ、さっくり解決してやればなんか謝礼が貰えるかもしれないぜ？」
「私の仕事は妖怪退治。人里でのごたごたは慧音に任せておけばいいのよ。」
あくまでそっけない返事の霊夢。彼女の言う通り、ただの泥棒であり、ただの人里での騒動であるなら彼女の出番はない。

ただの騒動であるなら。

同じころ。神社近くの山から人里に向かう獣道。人里の光もそこそこに見えるような山の中腹で、人が無残な状態で倒れていた。背負う籠の中には何もなく、そこにいるのは2人の妖怪。
「…リグル、ほんとによかったの？こんなことしたら…」
「……決めたことなんだ…私ができることなら…なんでもやるって決めたんだ。」
声は小さくとも、強い意志が込められていた。そんなリグルをミスティアはただ、見ていることしかできなかった。

神社でいつも通り、雪かきもそこそこに縁側

でお茶をする霊夢のもとに、上白沢慧音がやってきたのは翌日の正午近くだった。
「相変わらず…のようだな。」
「相変わらずよ。そんな会ってないわけじゃないでしょ。」
「お前のことではなくてな…。」
「休憩よ、休憩。」
「やれやれ。そういうことなら休憩を助長するものなど持ってくるのではなかった。」
そういいつつ慧音は包みを霊夢に差し出し、ついでに賽銭箱に小銭を放り投げた。霊夢はそれを黙って受け取り、空いた湯呑にお茶を入れつつ、話を切り出した。
「…割とおおごとみたいね…。」
「む、何か聞いているのか？」
「別に。あんたくらい律儀なやつだと、入れられた小銭の額と包みの重さでだいたいどれくらいの頼みごとがしたいのかわかるだけよ。あんたが何を頼みたいのかまではわからないわ、心が読めるわけでもないし。」
「…小銭の額が音だけでわかるのか…？」
「まぁ、ね。で、何かしら？」
「ああ、人里での盗難被害の相談だ。」
「…それはちょっと聞いたわ、昨日に。あんたはわかってると思うけど、私は警備員でも用心棒でもないんだからね？」
「うむ、そこを承知の上で…だ。」

そのころ、永遠亭。

「…確かに受け取りました。薬が出来るのは明日、日が沈んだ頃ね、その時に受け取りに来なさい。」
「はい。ありがとうございます。」
「ところで、材料、よく調達できたわね。素人にはそうそう見つからないのもあるのだけど…」
「運が良かったんです。それだけですよ。」
言い捨ててリグルは永琳の部屋を出た。永琳の次の言葉を待つことなく。

神社では霊夢が慧音からの包みの中身―立派な羊羹だった。もらいものらしい―をお茶うけにしながら、盗難被害の状況を聞いていた。
「家ごとに盗まれたものはある程度決まっていたが…今朝の被害は少し変わっていたのだ。」
「砂糖…はちみつに……猫又？」
「うむ、前二つに関しては前々からとられてた代表的なものだ。しかし、猫が、それも猫又をとるとなると、不穏な気がしてくる。」
「ていうか…猫又ってことは、被害にあったのは阿求んち？」
「そうだ。御阿礼の子の家に泥棒にはいる人間など…」
「いないことはないけど、里の人間ではないわよね。」
「だからお前に調査を頼んだ。まず犯行は人間のものか、そして、妖怪なら次来るところを叩いてもらう。」
「……それなら、まずは確認しなきゃならないことがあるわね。まず、阿求の家を見て、それから、念のため咲夜に確認。それと、慧音。とられたはちみつと砂糖の量をある程度でもいいから教えてもらえるかしら。」
「それなら、一緒にいこう。流石にそこまで確認は取れていない。」

霊夢と慧音が人里につくと、里の入り口に人だかりが出来ていた。
「…何事だ？…！ どうしたんだ、この血の匂いは！」
「あ…慧音様。それが…秘薬屋が…大怪我をして倒れているのが見つかったんです。今丁度ここへ運び込めたところで、今医者を呼んでます。」
「…！どこにいた？」
「山の中腹です。いつも、素材の調達に向かうと言っていたあたりで、崖下に落ちていました。ただ…籠の中身が空だったんです。」
「中身が？籠は背負っていたというのか？」
「…はいはい、ちょっと通して。見せてくださいなっと。」
「…博麗の巫女様まで？どうしたんですか、慧音様？ここのところの物盗りといい…何か起きているのですか？」
「いや、たまたま買出しに来たところを出会ったから一緒に来ただけだ…気にしなくて

いい。」
つき慣れない嘘をとっさについた慧音が感じ取っていたのは、人里の不安の拡がりと、ただの物盗りでは済まなくなってきている事件の拡がり。一方の霊夢は薬師の遺体のすぐそばでしゃがみ、目を閉じている。
「…どうだ霊夢、何か感じるところは…」
「………ごくわずかに妖力を感じるわ。ただ…これは…妖怪が直接的原因にはなっていない…かもしれない。」
「…崖から落ちてケガをした、というのはあってるのか?」
「多分。それより…」
医者がやってきて薬師を運んでいく。それを見送りながら霊夢はしばらく空を見上げ考えを巡らせているようであった。
「…今は新月間近……なのに……だけど、可能性は……慧音、一つ教えて。」
「ん?」
「あの薬師の家の場所を。しばらく彼の家で調べなきゃいけないものがあると思うわ。さっきいったことに関してはわかり次第私に伝えて。」
「…わかった。」

「…あと二日か。みんな、ありがとう…」
「別にいいよ、あたいはまだなんもしてないし」
「それにそういうことは全部終わってからいうもんだよ、リグル。」
「そーなのだー」
「…そうだね。全部…終わったら…」

（続く）

〈作者コメント〉
初の連載物です。いきなりなんか重い感じではじまってますが。
そして全然リグルでてませんが。
つたないものとなりそうですが、温かい目で見守ってくだされば幸いです。

冬のある日

著者：夏樹 真

雪が、空からヒラヒラと舞い降りてきていた。

自分の隠れ家からちょっと離れた場所を、蟲の妖怪であるリグル・ナイトバグは歩いていた。

一歩一歩足を踏み出すたびに、ずむ、ずむっという積もった雪を踏む音が静寂の中に響き渡っている。

昨日から降り始めた雪は、一晩を越えてかなりの量が積もっていた。滑らないように慎重になりながらも、それでも頭の中で何を考えるでもなくリグルは歩き続けていた。

空を飛んだほうが転倒の危険もないし、安全ではあるのだが如何せん寒さが厳しすぎるのである。冬なのに厚着するような服を持っていないリグルにとって、寒さは大敵であった。なので、今日はのんびりと歩くという選択をしたのだった。歩くことで体も温まるだろうという考えもあったりする。

本当ならば、リグルの賑やかな友人たちと一緒に活動をしているような時間である。氷の妖精であるチルノや、闇の妖怪であるルーミア、夜雀のミスティアあたりとよく賑やかにしているのだが、今日に限って誰とも都合があわなかったのだった。

特にやることもないし、隠れ家でのんびりとしているのも良かったのだが、あまりにも暇すぎて家を出てしまったのだった。

寒い中をのんびりと歩いていたのだが、今はこうやって出かけてしまったことを少し後悔していた。

（……寂しい、なぁ）

寒さと一人で居るという孤独感から、言いようのない寂しさに襲われてしまっていたのだった。

蛍の妖怪であるリグルは、夏場などは様々な蟲達の女王のような存在となっている。みんなの面倒を見たりして蟲達の安全をリグルなりに守ったりしているのだった。

だが、冬となると蟲達の絶対的な数が減ってしまう。それはつまり、リグルが関わることの出来る相手が減ってしまうということでもあった。

夏場と比べての、圧倒的な静寂。そんな音の少ない所に一人で居るというのが、リグルとしてはとても寂しく感じられることなのだ。だからこそ、普段は誰かと居るようにしているのである。

自然とリグルの足が止まり、空を見上げる。白く濁ったような雲達から、白い雪の粉たちがゆったりと地上へと舞い降りては、積もっていく。その景色の儚さが、リグルの感情を更に刺激していく。

だが、そんな時に不意に声が聞こえた。

「おや、お前は確か……いつぞやの蟲の妖怪じゃないか」

声に反応してリグルが視線を落とし、背後を振り返るとあんまり見慣れない人物が立っていた。

白い雪化粧をしている森の中でも鮮やかに

目立つ短めの銀髪に、緑色のベストとスカート。白い幽霊みたいなものが周囲をフワフワと浮かんでいる。そして一際目立つのは、背中と腰に差されている二本の刀であった。その刀には、どことなく見覚えがある気もする。

　相手の方は自分を知っているようだが、リグルはどうにもはっきりと思い出せない。微妙に見覚えがあるので、きっと何処かであったことはあるはずのだろう。

「えーと、多分どこかで会ったことはあると思うんだけど、誰だっけ……？」

　なので、恐る恐る聞いてみた。

　相手の落ち着いている雰囲気を見ていると、これくらいで怒られるとは思わないがそれでもやはりほぼ初対面かもしれない人に質問するというのは気が引ける。意識しないうちに、リグルの背は少し丸くなってしまっていた。

「ん、そういえば名乗っては無かったかな。私は魂魄妖夢、あの夜はいきなり攻撃してしまってすまなかったよ」

　魂魄妖夢。やはりリグルには聞き覚えが無い、と思ったのだが妖夢という言葉にちょっとだけ引っかかるものがあった。そして見覚えがあるというか、痛い目に合わされた気のするあの二本の刀。リグルの記憶の中に、だんだんと思い出したくない分類の記憶がよみがえってくる。

　ちょっとだけ不思議な感じのした夜。人間でも脅かして遊ぼうかなと思っていたときに遭遇した二人組み。その二人をからかおうとして、何故か弾幕バトルになって。こてんぱんにされた、記憶を、思い出した。

「あぁー……うん、妖夢のこと覚えてる。思い出したよ、あんまり思い出したくないけど」

「ごめんごめん、あの時は幽々子様の命令だったし、ああするしかなかったんだって」

　嫌な思い出を連想して、リグルは両手で自分の体を抱きしめてしまう。あの時の恐怖を思い出して、ブルッと体が震えた。確か、斬られるとか潰されるとか言われたような気がする。

　そんなリグルを見て、妖夢は苦笑していた。そんな様子を見ていると、あんまり悪い人ではないのかもしれない、などと思ってしまう。

「リグルはこんな寒いところで何をしているの？」

「うーん、特に何かしていたわけじゃないよ。ただ暇だったからぼーっと散歩していた感じかも。妖夢は？」

「私は幽々子様の命でとある物を探しに来たんだが……はぁ」

　そこまで言って、妖夢はため息をついた。

　幽々子、というのはきっと前に会った時に妖夢と一緒にいた人のことだろう。妖夢が様付けで呼ぶくらいなのだから、きっと妖夢より偉い人なんだろうなぁと思う。

　しかし、妖夢のため息の理由が気になる。リグルはそのまま妖夢が口上を続けるのを待つことにする。

　そしてしばらくの沈黙の後、ぼそりと呟いた。

「……こんな真冬に、春の食材を探せとか私はどうしたらいいんだろうか」

　先ほどまでよりも低いトーンで、妖夢はそう言った。

　まさか言葉に、リグルは耳を疑った。

　誰がどう見たって、今は冬である。真冬なのである。暗い雲のカーテンからチラチラと綺麗な雪の欠片が舞い落ちてきているのだ。そんな景色を前に、妖夢は春の食材を探さないといけないと言ったのだ。

　はぁぁぁぁ、という深いため息と共にがっくりと肩を落としてしまう妖夢。そんな無茶な命令をされてしまえば、誰だって嫌になるだろう。リグルはそんな妖夢に同情を感じざるを得なかった。

「それはまた凄い難題を押し付けられたんだね……うん、頑張ってね」

「あはは、リグルは優しいな……霊夢や魔理沙あたりにこんなこと言ったら馬鹿にされるだろうなぁ」

　自嘲気味な妖夢の笑い声が響く。それに対して、リグルは苦笑いを返すことしか出来なかった。

　どことなく、妖夢に自分と同じような苦労している点を見つけた気がした。この人とは

仲良くなれる、かもしれない。なれればいいな。
　ごほん、と咳払いをして妖夢はキリッと背筋を伸ばして普段の姿勢に戻る。まったく曲がっていない、綺麗な背中である。
「話を戻すが、こんな寒い日に散歩だなんて暇なのか？」
「まぁ暇といえば暇なんだけどね。ちょっと寂しくなっちゃったから気晴らしも兼ねてるんだ」
「寂しい？」
「うん。みんなが……蟲達の声が、ほとんど聞こえなくなっちゃうからね」
　リグルはそう言うと、少しだけ視線を下に落とした。
　こんな寒い日に、一人でいるというのはそれだけで寂しさが募ってしまうのである。それは、みんなの声が聞こえないから。こんな寒い日には、みんながいなくなってしまうから。
「なるほど、な。確かにこの寒さではお前の仲間達はみんないなくなってしまうものな」
「うん。だから、いつもはチルノ達と遊んだりしてるんだけどね。今日に限って、みんなダメだったんだよ。だからどうしても寂しくなっちゃって、こうやって何も考えないようにしてたんだ」
　夏のあの賑やかさが嘘みたいな冬が、リグルは苦手であった。
　蛍の妖怪ということもあり、元々寒さが苦手である。それだけでも冬は嫌なのに、加えて仲間である蟲達の声もほとんど聞く事が出来なくなってしまうのだ。
　不意に襲われる、言い様の無い孤独感。まだ幼さの残るリグルには、それを自分でどうにかするような強さを持てていなかった。だからこうやって、足掻きもがいているのだ。
　リグルの目に、ほんの少しだけ涙が浮かびそうになっていた。そんなことを考えてしまったばかりに、忘れようとしていた孤独感がまた戻ってきてしまったようだった。ぐっと耐えるように、体に手を回す。
「そうか……大変なんだな」
　妖夢の声にも、リグルは視線を上げることが出来なかった。
　そうやって言いようの無い寂しさと戦っていると、ふっと体を包まれる感覚があった。
　顔を上げると、妖夢がリグルを抱きしめていた。寒さと孤独で縮こまっているリグルの体を温めるように、妖夢のその手は回されていた。
「妖夢……？」
「私には、お前の辛さがどれだけ大変なのかは分からない。だから、こんなことしかしてやれない」
　そう言うと妖夢はリグルに回す手に力を込めたのかぎゅっと、優しく締め付けられる。
　突然のことにリグルの頭が軽く混乱してしまっていた。何故か顔の体温だけが、急激に上昇しているのが分かった。でも、それが恥ずかしさから来ているというのを理解するのには時間がかかってしまった。
　ドキドキしているのを隠しながら、リグルは妖夢の顔を見てみる。妖夢の方が背が高いので、自然と見上げる形になってしまう。
「お前は一人じゃない。寂しくなれば、誰かを頼ればいいんだ。それは私でも良いし魔理沙や霊夢でも良い。それに、お前には大切な友達がいるんだろう？」
　そういうと、妖夢はリグルから視線を外してその後ろへと向ける。リグルもつられて振り返ると、そこには今日は遊べないはずだったチルノやミスティアの姿があった。何かを探しているのだろうか、辺りをキョロキョロと見回しながら歩いているようだった。
「え、みんななんで……？」
「きっとみんなリグルのことが心配なんだよ。だからこうやって来てくれているんじゃない？」
　そう言うと妖夢はリグルから手を離す。自由になったリグルは、チルノ達がいる方向へと体を向けるとそのまま足を止めて立ち尽くしてしまった。
　本当はすぐにでも駆け寄りたかったのだが、もしかしたら何か用事をしているのかもしれない。もしもそうだったら、自分の我侭でそれを邪魔するわけにはいかない。そんな思いが、リグルの足を止めていた。
　そっと、リグルの背中が押される。それにより、リグルの足が一歩前へ出た。

「ほら、何を怖がっているんだ。仲間は信じるものだろう、きっとお前を探しているんだから」

「……うん！」

そのまま、リグルは足を前に出して走り出した。始めはゆっくり、そして徐々に加速して。

チルノ達もリグルに気づいたのか、大きく手を振っている。それに答えるように、リグルも手を振りながら更に加速して行く。そしてそのままの勢いでチルノ達に飛びつくと、みんなで仲良く雪の中へダイブしてしまった。

そんな様子を見て、妖夢は微笑んだ。

「仲良きことは美しきかな、なんてね。私も探し物頑張ろうっと……」

ため息一つ。後ろから聞こえる笑い声を背に、妖夢は途方も無い探し物を続けるのであった。

（終）

〈作者コメント〉

初夏樹です。今回はいつも以上に時間がないし、個人的にも納得いかない点もあるんですがどうしても書きたかった妖夢とリグルです。入れたかったけど時間の関係で断念した部分もありますので、いつかリベンジしたいなぁ。

1月号テーマ

お正月特集

『今日の主役』　巳

帯のデザインとか着物の柄とか考えるのは好きなんですが、描くのが難しくて描けません。ところでみすちーの耳はどこへ…？

『 緑髪年越しナイト 』 涼音 奏

「さぁリグル、早くしないと麺がのびてしまいますよ。それに、年越し蕎麦は年を越す前に食べなくてはいけないのです。これには諸説ありますが～……」「で、私の分は無いのかい。まぁ紅白見れたからいいけど」（いやいや緑髪繋がりって言ってももっとこう絡みやすいのがいるでしょってかこの横の人誰なの知らないよ気づいたらいたからなんか怖いし！）
--http://rshk.uijin.com/

『 ほたりぐる～正月編～ 』　怒羅悪

引き続き投稿のどらおです。ミスティアが餅の用意、大妖精が丸椅子を運び食卓の準備をして、その間ルーミアとリグルが羽根突きで遊んでて、チルノは気づいたらこうなったっていうシチュです（長多分レティさんは裏で餅突いてると思いますｗ　それでは、失礼しました。

『 民族衣装 』　ADDA

韓国は旧暦のお正月を記念して今年は 2月 14日がお正月です。
陽暦で毎年変わるのが…　こよみをまともに見なければ，いつがお正月なのか分からないでしょう。
まぁ、このお正月がそのお正月なので韓国の民族衣装である韓服を着せて見ました。よく似合うかな…

『 Nightbug with New year, and Korean clothes 』　IDEA (GAGRim)

I support Wriggle x Yamame

『 謹賀新年 』　緑

新年明けましておめでとうございます。頑張ってリグルを愛でて行きましょう。

『 夜の集い 』　ウリック

チルノ『あたいったら最強ね！（富士山的な意味で）』　大妖精『チルノちゃん！？』
誰でも投稿できるという事で送ってみましたｗ後悔はしていない←
塗りがまだまだ未熟ですが＾＾；ペンタブほしいなぁ・・・マウスじゃキツイｗ

『 今年も宜しくお願いします 』 貴キ

今回は前々からやってみたかった切り絵に挑戦してみました。
2010年もリグルとリグルを取り巻く皆様にとって良い年でありますように！！

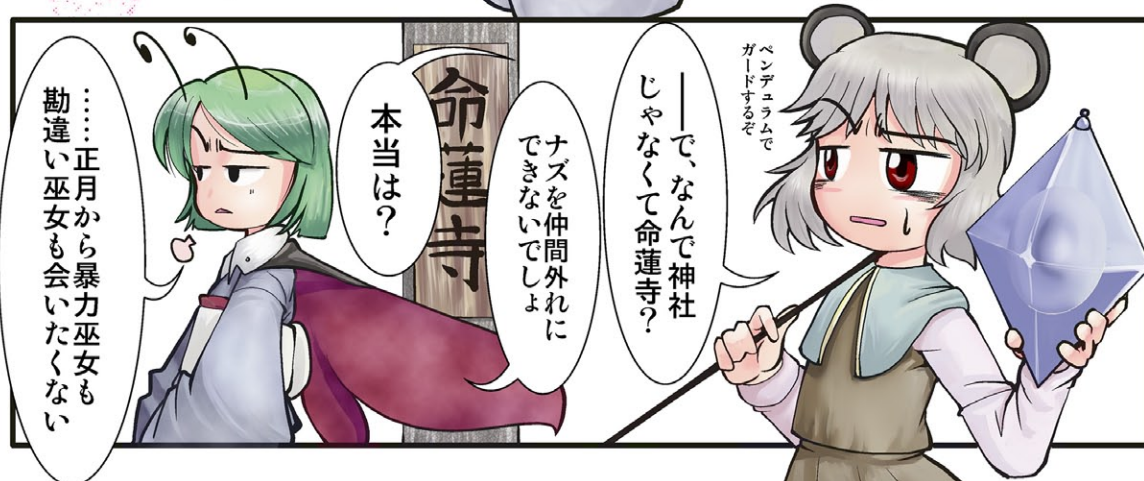
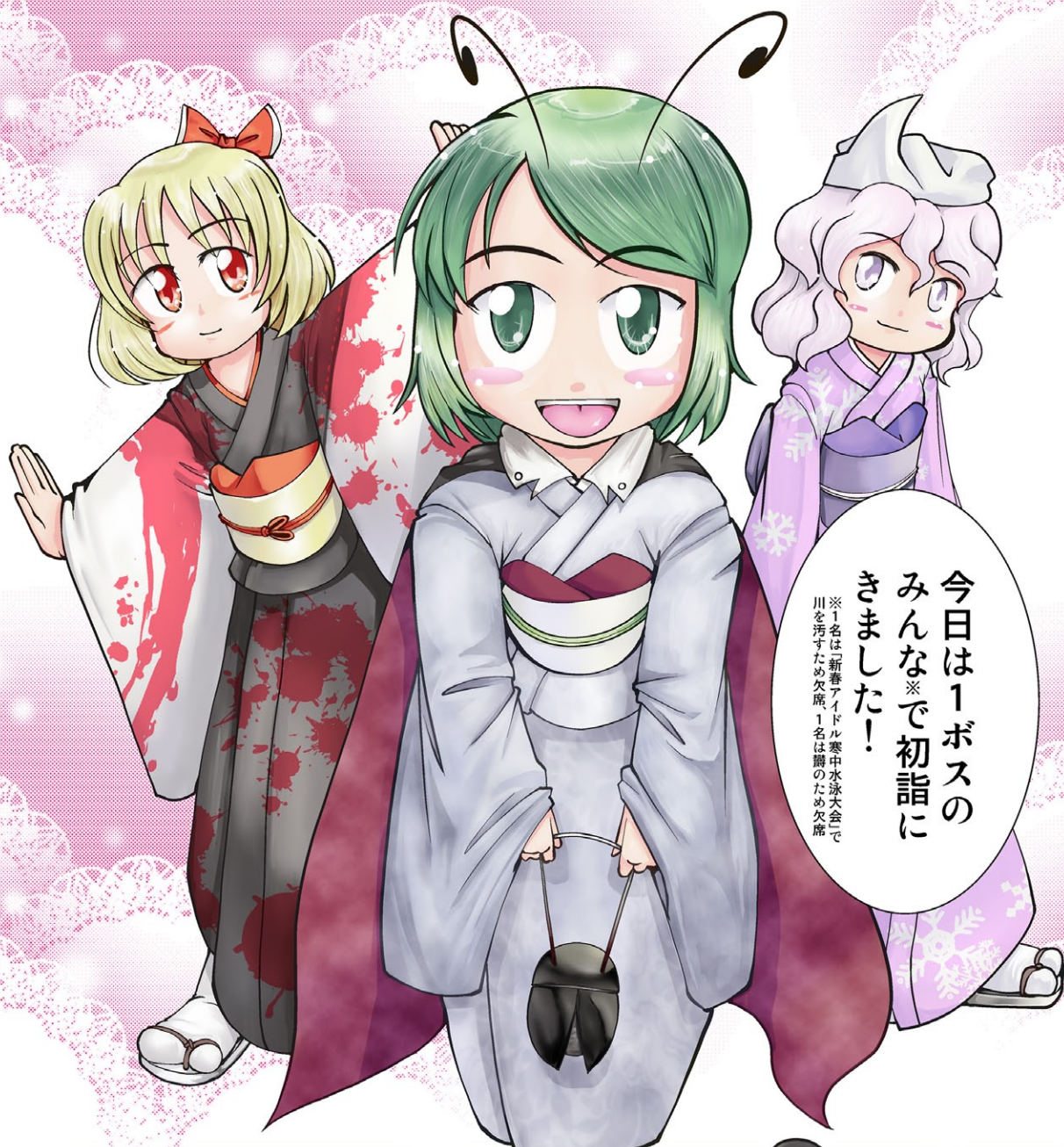
『 商売繁昌祈願 』　蛍光流動

「貧乏巫女が不景気を吸い取ってくれると聞いて」

『 蟲の年賀状サービス 』 Salka

何かこのネタ予想されてそうです（笑）今年もリグル好きなそこのあなたにいい事がありますように、なんて。

今日は1ボスのみんな※で初詣にきました！
※1名は「新春アイドル寒中水泳大会」で川を汚すため欠席、1名は爵のため欠席
ペンデュラムでガードするぞ
――で、なんで神社じゃなくて命蓮寺？
ナズを仲間外れにできないでしょ
本当は？
命蓮寺
……正月から暴力巫女も勘違い巫女も会いたくない

謹賀新年

蟲の手帖

描いた人 HOUSE

1月号

2010 JANUARY

ちょっと
びたん

私の年賀状にホーミング札貼ってやがる
こんな悪趣味なものを渡すためだけに出てきたのかしら
新年早々

あんたみたいな小妖怪がうちに顔を出すのは珍しいわね
ハクレイヤバイ
マジヤバイ
大抵は敬遠するわよ

虎穴に入らずんば…よ！
蟲の地位向上のためならたとえ火の中水の中あの子の巣穴のな
ギャッ
しゅっ
気色悪いわ

でも今日の話は霊夢にとって悪い話じゃないと思うの！
いてて

…あん？
私忙しいんだけど

ここのところ新しい神事を試したり…！…
…！…新しいご神木を祀ったりしてたよね

ー…
ー…
なるほど
縁起物ねぇ
千万点

あんたが提案するものだし さては トンボか…
…スズメバチかしら?
ミヤマアカネ
体長 約24mm(6~12月)

うんにゃ
あっさり
…あら?

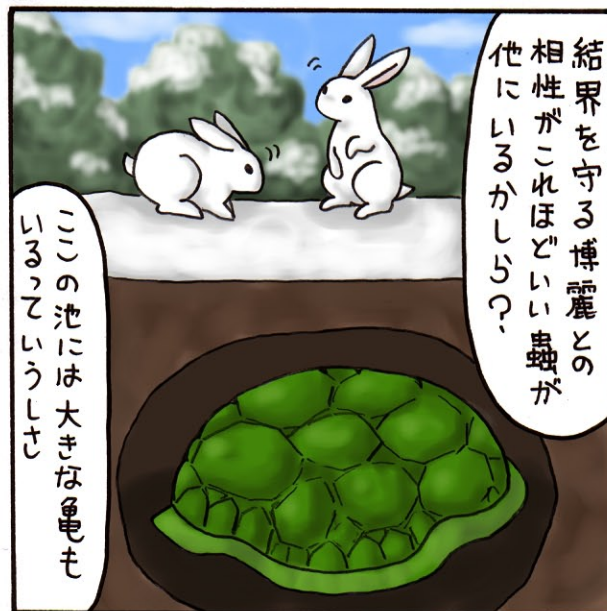
勝ち蟲(トンボ)はどちらかというと 軍神と関係のある守矢向けかな
サナエトンボなんてのもいるしねー

スズメバチの「商売繁盛」と博麗は相性が悪ーい
やかましい
ぎゃっ

だ…だから!! 博麗らしいものを押したいの!!!
ケンカを売りに来たってことね そうなのね
霊
ゴゴゴゴゴゴ
…何よ

博麗らしい縁起蟲…!
それは カメムシよ!!
バァ

クサギカメムシ
体長 約15mm (4~10月)

チャバネアオカメムシ
体長 約10mm (4~10月)

エサキモンキツノカメムシ
体長 約14mm (5~10月)
卵・幼虫を保護する性質を持つ。
ハート模様が特徴的。

合格祈願

博麗神社
蟲手のコラ

ちょッ!?

ひえぇ

夢想天生はらめぇ…

祈願済みカメムシで 目指せ絶対合格!!

「蟲の手帖」編集長、リグル・ナイトバグが博麗神社を参拝してきま。
(祈願の様子は こちら から!)

いたい いたい!!

幸運のカメムシをあなたのお宅で越冬させませんか!
詳しくは「蟲の手帖」1月号特集ページにて!!

リグると！
はつゆめ

なにぃ！
スカッ
アイシクルフォール！

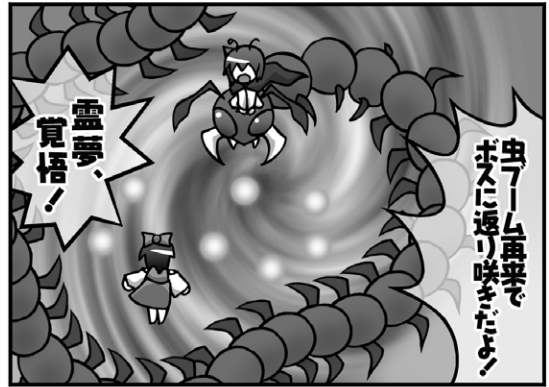
霊夢、覚悟！
虫ブーム再来でボスに返り咲きだよ！

キャー
ゆうか と こうかんした
ひまわりムカデが いうことを きかない！

リグル！ほら！
これ気持ちいーよ！
あ、ちょ、やめ…

男同士だが関係ない！
キャ
お前が好きだ!!!

よいお年を！

ひどぅん

お正月だ!!
お正月と言えば!?
初詣!!
おさいせん入れてね?
もちつき!!
フヒヒ…
ああああ
羽根つき!!
アタイサイキョーすぎてまっくろ!!
どんだけ負けたの?
そしてデュエル!!
いやいや…リグル?
パロディは来月だよ?
デュエルネタの人あせるよねー

謹賀

新年

びしゃもんてんはえちごのりゅう

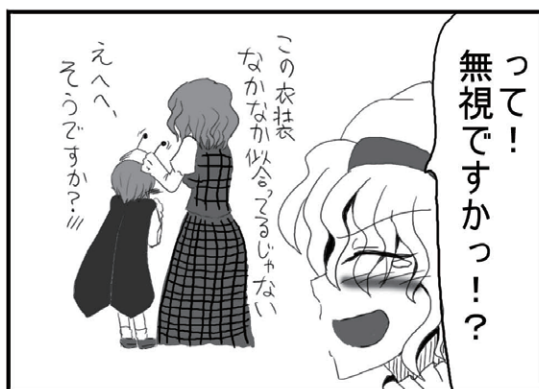
楽屋ウラ的何か。

描いた人
草加あおい

リグルの年末年始

描いた奴：キッカ

起

承

おしまい
皆様よいお年を

デシャヴ

Happy New Year

preludenano

餅つきとかけるのは少し苦しい

竹やぶ燃えた

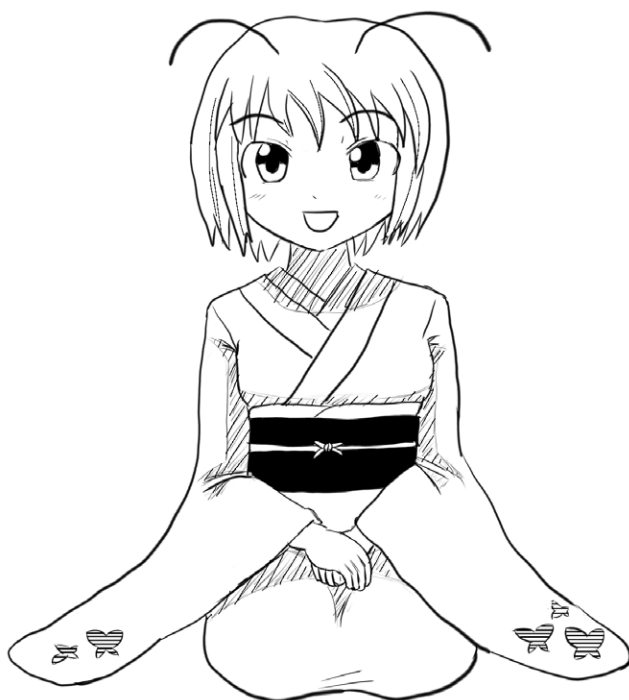
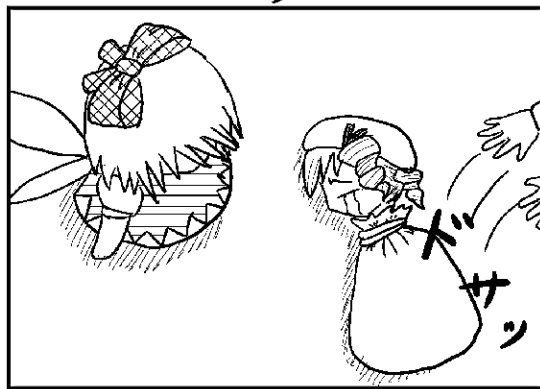
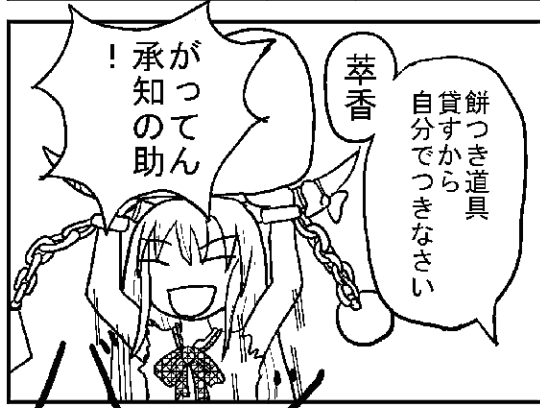
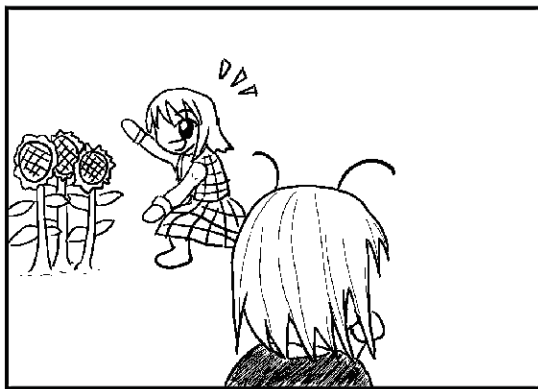
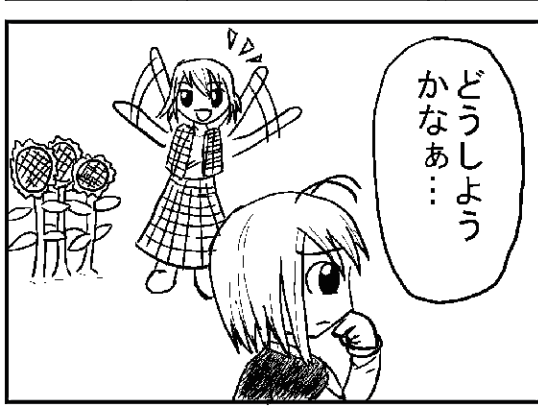
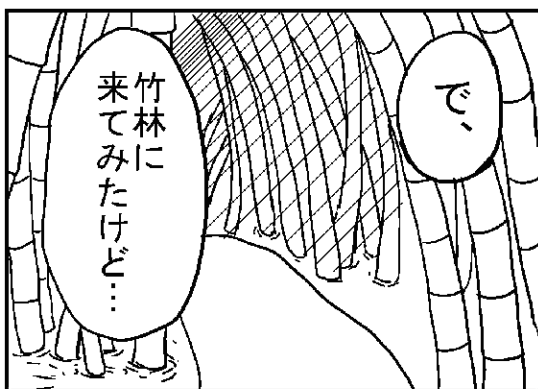
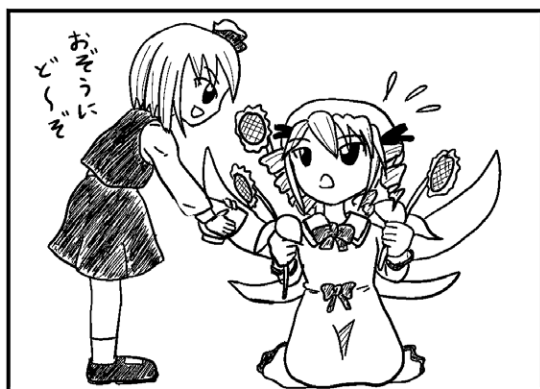
こうしてお正月が開催された

?

学芸会を思い出すわぁ

あけでとう！
みんなでお正月のうなぎ食べよう

ほらっ

新年おめでとう
今年もよろしくね

お正月にうなぎ…て、

Wriggle the last song.

著者：Jade.

　守矢神社で、楽しそうに外の世界の音楽を聴く人間達。
　それに興味を示した妖怪達一同。
　そこに、紫と新聞記者が登場。年末に博麗神社で演奏会を遣ると言うので、魔理沙達と共に山の妖怪や巫女から楽器と演奏器と曲をわけ与えられ、楽団（山の巫女や天狗は、こういう形態の楽団を「バンド」と呼んでいた。）を結成して演奏する事にしたのだが……。
　ＫＯＮＯＺＡＭＡというわけである。
「あーーーもぅ！ こんな呆けてたって何にも始まらないわ！」
　ミスティアが、パンッ！ と膝を叩いて立ちあがった。
「ツインギターでスウィープだのベースでスラップだの、ＢＰＭ１８０オーバーでツーバスドコドコ２ビートだの、ストリングスシンセの打ち込みだのできるわけないのよ！！！」
　早口で宇宙語を連射してから、くるりと、後ろで未だに世紀末の最中にある５人の仲間達を振り返った。
「妖精３人！ あんたたちはまず開放弦（指で押さえない状態の弦（のチューニングをちゃんとして。音叉もらったでしょ？　で、ＡＢＣＤＥＦＧ（ラシドレミファソ）と１２３４（人差し指から小指）からまずわかるようになりなさい！ ギターのコード（和音）はそれからよ。わかんなかったらもう、プリズムリバーの弦楽
「だよねー……」
　力ない夜雀の声が、静謐に一滴広がる波紋の様に、広がって……消えた。
「出来るわけないよねー……」
　確かに、私たちよりもずっときれいでよく響く大きな声だ。流石に歌うたい。
　そんな問題の本質とはかけ離れた無意味な感想が、リグルの頭にただ、浮かんでは消えた。
　広場に集まった全員が、無言のままに両手で顔を覆い、俯き加減で地面に正座している理由は一つである。
　いきなり合わせて演奏なんて、出来るわけないっつーの……。
　一同は氷精の号令一下、勢いでセッションを始めて見たものの、この中にまともに音楽の知識があるのはヴォーカルを取るミスティアのみ。
　チルノも大妖精もルナチャイルドもリグルもルーミアも、演奏目的で楽器に触ったのは今日が初めてなのである。
　ドレミすら弾いたことがない。
　仮名ならいろは。あいうえお。
　幼稚園レベルである。
　当然、演奏開始から数１０秒後。
　即ち、ミスティアの独唱に続いて楽器がまともに演奏を始める瞬間からわずか２秒後に、演奏は見事に瓦解した。
　ここで、前号のあらすじを説明しよう。

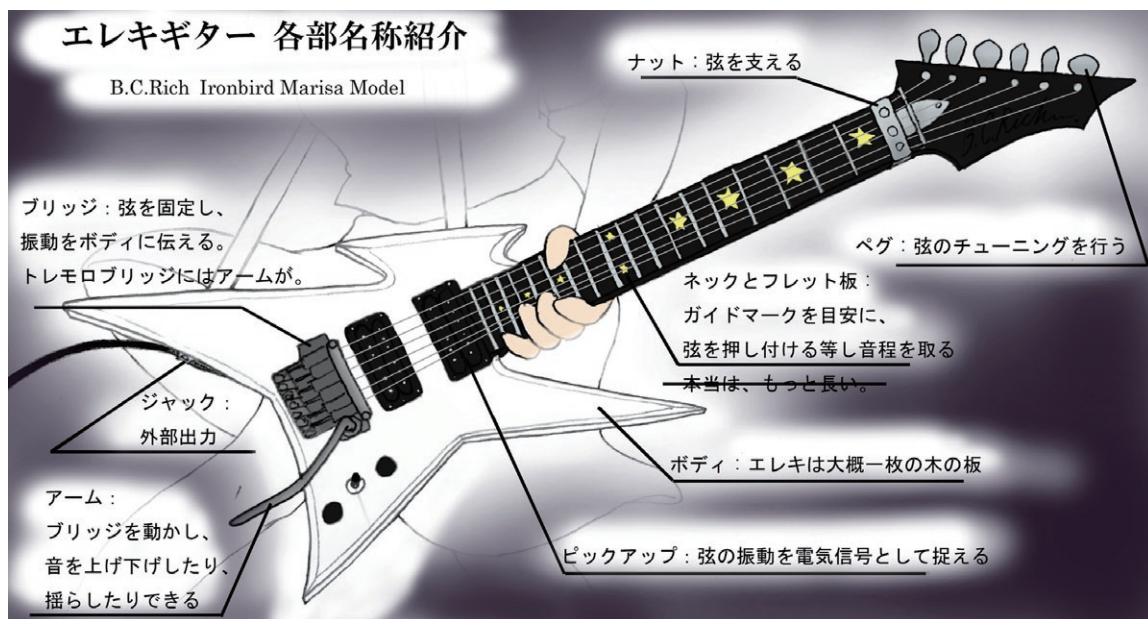
「何？ ギターを教えてほしい？」
「うぇ〜めんどくさいなぁ……」
　こう言いながらも、チルノ達が誰もいない廃洋館で粘る事三日を経て、やっとつかまえたプリズムリバー三姉妹は、訪れた者たちの指導に当たってくれた。
　幻想郷で、彼女らに音楽を習いたい等という事はおそらく珍しいのだろうが、熟達者にとって教えるというのは、それほど悪い気のする事ではないのだろう。
　また、演奏と練習に明け暮れる彼女らにとっては、滅多とない日常の変化。芸術家として、刺激になる出来事を好まない道理もない。
　それに、自らと同じく音楽を愛する者達の気持ちを無碍にするのも、プリズムリバー姉妹、自身いい気持がしなかったのではないだろうか。
　リリカは、ルーミアのキードードの調整やプログラムをし、操作を練習させた。
　バンドの演奏に使用されるキーボードは、子ども用のスピーカー内蔵の物とは違う。
　ちゃんと、ヘッドフォンか、アンプやスピーカーにシールドでつながないと、音は鳴らないのだ。
　キーボードの役割は、通常の打鍵による演奏だけではない。
　伴奏やドラムパートの自動演奏等の機能も備えている。
　目的とする外の世界の楽曲のバックに使われている、フルオーケストラが如き大仰なシンセサイザー音を少しでも再現する為、彼女の楽器の調整は、おそらく最も面倒かつシビアな物となるだろう。
　そして、それをタイミングよく再生するリズム感。
　ミスは許されない。
　その作業は、数日後にドラムセットを抱えて合流してきたリグルにドラムパートを教えながらとなったのだから、終始面倒臭がっていたリリカも、案外この楽器教室を楽しんでいたのだろう。
　ルナサは、チルノ・大妖精・ルナチャイルドに弦楽器の扱いを教えた。

器の人に習ってきなさい。リグルはとりあえず８ビートから！ ドラムはよくわかんないけど、大概それを覚えないと始まんないはずよ。ッ、ッ、タ、ッ、ッ、ッ、タ、ッ、バックビートだから２拍目にバスドラ踏む、４拍目にスネア。とりあえずそれできるようになる事。 ２ビートも１６ビートもたいして変わんないわ。速くなければね。ルーミアは……にとりさんとこか……いや、廃洋館のリリカさんとこにでも行って、なんとかしてもらって！ はい散る！！」
　ミスティアの一声は鶴のそれ。
　行き場を失いかけていた情熱達が、ポンポンとはじかれるように飛び立ち、方々へ散っていく。
　リグルだけは、ドラムセットがあるのがここなので、ひとまずその場で言われた練習を始めた。
　ハイハットを、ッ ッ ッ ッ ２回目にバスドラ、４回目にスネア……
　ッッ（ドン）ッッ（タ）ッッ（ドン）ッッ（タ）……

――――――――――――――――――――――

　そして、夜が明けた！

　……４０〜５０回ぐらい。
　今、森の広場には、何とか全員で演奏を練習する６人の姿があった。
　こうして、合わせて練習できるようになるまでには、各自努力があったわけである。 チルノと大妖精とルナチャイルドは、湖の廃洋館でルナサ・プリズムリバー、ルーミアはリリカ・プリズムリバーに会った。

　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

が変わり、一本弦が切れたら全てを交換しないと、音の整合性が取れなくなってしまう事。

ベースの弦の強靭さと、その要求する握力による抑えにくさ。

正確に音を出すことより、むしろリズム・拍子を正確にとる事を意識しないと、すぐにバンドの演奏自体が空中分解してしまう事。etc...

「こら、親指回してネックを握らない。箒や祓い棒じゃないんだから。親指はネックの裏を支える、掌はネックを受け止めるように地面と水平。ほら、お前達の好きなテンポの速い運指がしやすいだろう。ミスも減った。そこ！ 短い指でコード（和音。複数の弦を同時に抑えて鳴らす。）を握りにくい時とかだけ、サッと上から親指回して六弦を押さえる。手が覚えて、自然にできるようになるまで練習。とりあえず正確に音が出せるようになったら、今度は拍をしっかり一定に保つ練習だぞ。メトロノームを追っかける様じゃ駄目だ。これが出来ないと、こんな難しい曲を楽団で演奏はできない……！ ベースは、ギターとは演奏の中での役割が違う。基本を覚えたら、リリカの所でドラムスと一緒に練習すること。」

「ほらほら～もっとがんばらないと～。ステージじゃただ弾いてるだけじゃだめだよ？ そんなんじゃステージに上がる意味が無いんだか

ギターの開放弦は基本的に、太い六弦から細い一弦に向かって、Ｅ（ミ）Ａ（ラ）Ｄ（レ）Ｇ（ソ）Ｂ（シ）Ｅ（ミ）に調節する事。

指板に付いている〝盛り上がり〟で、指で弦を押さえ付けて音の高さを決めるフレット。

彼女らの物は２４のフレットを持っているが一つ隣のフレットは半音、二つ隣は全音（一音）ずれる事。当然一と六弦は同じ配列となるが、２オクターブ違う事。六弦から一弦に向かって、１つ弦が細くなるごとに同じ音は２～３弦の間では３フレット先、それ以外では４フレット先になる事。

ベースでは基本的に、四弦から一弦に向かって、開放弦をＥ（ミ）Ａ（ラ）Ｄ（レ）Ｇ（ソ）と調節する事。その音は、ギターの六～三弦の１オクターブ下の音がである事。１オクターブ高い音は、二弦隣の２フレット上に有る事。

そして、そんな技術的な基礎知識より、弾き始めて初めて気付いた事もある。

弦は、ピックで手首を使い円を描くように引っ掻くのでは、ちゃんと鳴ってくれない。弦に対してピックを垂直に上下させて弾かねばならない事。

ギターの一弦は細く、特にリードギターのチルノはよく使うので、切れてしまう事がある事。弦は弾いているうちにどんどん長さや音

わね。ヘヴィメタやるにはもっと低い音で……ちょっと姉さん達ギターの音うっさーーーーい！！ リズム聞えないでしょ！！！」

……何日も、何日も、プリズムリバー姉妹は自分達の練習やスケジュールの合間を縫って、チルノ達を指導した。

プリズムリバーが不在の時は、姉妹に言われた通り、ギター二人とベース・ドラムにわかれて、自分達だけで練習もした。リズムギターの大妖精は、他に約束があったようで度々姿を消していたが……。

勿論、休憩・睡眠時等は演奏予定の曲を何度も何度も繰り返し聴いて、自分のパートを体に覚えさせる。

そうして、ある程度楽器に慣れ、とりあえず躊躇わず扱えるようになってきた。

「……うむ、様になったとは言えないが、大体慣れては来たようだな。」

「うん、もっと走ったりモタったりするかと思ったけど、リグルとルナチャイルド、意外にリズム感あるね。あとは、全員集まって曲の練習しな。」

ルナサ、リリカ、ギタリスト二人に色々ちょっかいをかけていたメルランにも、三姉妹に礼を述べ、餞別にともらったメトロノームを片手にチルノ達は、ミスティアの待つ森の広場へと向かった。

リグルだけは来た時と同じように、自分のドラムセットを運ぶため、独り何往復もする羽目となった。

「どういうことなの……？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そして、全員集合。いざ、曲の練習である。

と言っても、いきなり全員合わせて演奏ができるわけではない。

リズムパートのベースとドラム。メロディパートのギターと、ヴォーカル。それぞれ、自分のパートをある程度遅れず走らず出来るようしっかり練習する。

ら。ライヴは体全体、ステージ全体を使ってなんぼだし、曲の間の喋りでだって、自分達を表現できる。ステージでやりたい事があるから、ステージに上がるんでしょう？ そんぐらいの余裕ができるぐらい練習しなきゃいけないんだよ〜？」

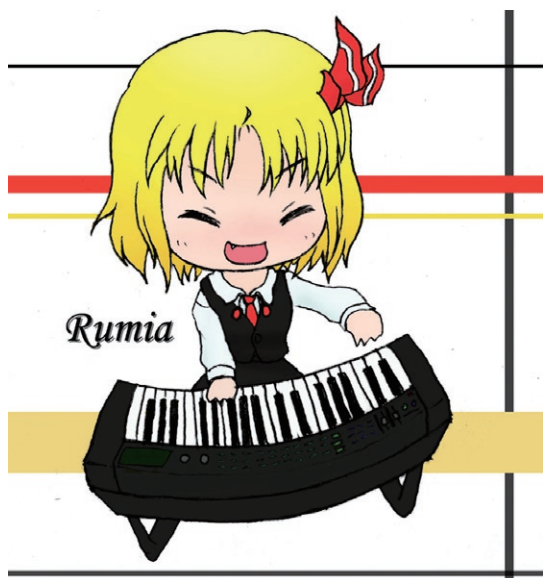
「メトロノームに合わせてバスドラ！ ドンッドンッ……て、なんでメトロノームに合わせて踏んでるのにカッチカッチが聞こえるのかな！？ 次は、ハイハット入れる。チ、ド、チ、チ、はい次スネアも入れる！ チ、ド、チ、タ、チ、ド、チ、タ、叩く位置、力の入れ方一つで音のデカさコントロールしなきゃいけないんだからね？ 曲やる時は抑揚つけてよ抑揚……ほらベース！ ちゃんとドラムのビート聴いてよ！？ しっかり合わせて弾いて、まずバスドラに……ハイハットも……スネアも……ちゃんとドラムを見る！ 目で聴くの目で！ リズム隊は二人で一つ。あんたらがバラバラじゃ客はノれるもんもノれないの！！ あと、ストラップ長いわね。あんた私よりちっちゃいんだから、もっと高めに詰める。長いほうがかっこいいけど、見た目気にするのは上手くなってからだよ。てかドラム！ スネアとかタムの音とかおかしくない？ 太鼓にだってちゃんと音程あるんだからね、チューニングキー持ってるでしょ！？ 締めたり緩めたりちゃんとしてる？ スネアの音も軽い

いアリスの元へ林内留学となってしまった。
　リグルやミスティアも面識が無くは無かったが、ルナチャイルドと大妖精が顔が利くと言うのだ。
　あの多彩なスペルカード名のイメージから、外国語をよく知っていそうだし、魔法を使う彼女なら、外国語で書かれた魔道書の扱いにも詳しいだろう。

「あら、また来たのね。」

　自宅の居間でチルノ達を迎えたアリスは何と、ピロリンピロリンとギターを弾いていた。
　聞けば、魔理沙の楽団に誘われ、強引に練習させられているのだと言う。
　ルナチャイルドは、光の三妖精そろって彼女と交流がある。
　大妖精は、ルナサにギターを習う合間、空隙の時間にはプリズムリバーの廃洋館を抜け出し、ここに通ってギターを習っていたのだという。
　彼女は、湖畔で練習するアリスの姿を見ており、少しでも自分が上手くなってチルノをサポートできるようにと、教示を願ったらしい。
　チルノが、ルナサ不在の中だらしなく昼寝している間、彼女は別の先生に講義を受けていたのである。
　これに大発奮したのがチルノ。
　魔理沙に大妖精に負けじと強引にアリス邸に泊まり込み、英語とギター交互の練習を敢行したのだ。
　エレキギターは、普通のアコースティックギターに比べて弦が柔らかく、それを利用した様々な奏法がある。アリスは手先が器用で、色々な弾き方を知っていた。
　一つの弦を鳴らし、その音を鳴らしたまま次の弦、また次の弦と鳴らして和音を作るアルペジオ。
　それと似た要領で高速で弦を押さえながら、ピロピロピロピロと連続して上下に並んだ多くの弦を弾いて猛スピードでメロディーを奏でていくスウィープ。
　ピックを使わず、人差し指や中指で弦を直接

　それをやらないと、バンドで演奏を合わせて練習するレベルにすら達しない。
　毎日毎日、四六時中延々曲を聴き、音をとる。
　わからない部分や難しすぎる部分は、ちょっと誤魔化したりしながら。
　それでも……
「ところで私たちがやる曲、コーラスとか入りまくりだけど、私の後ろ誰やるの？」
「あたいやるやる！！」
　特に乗り気だったこの二人が、ツインヴォーカル体制を組もうとしたのだが……
「Fight your holy war raise your mighty sword and ride
You're the chosen face the evil son of holy ice
……私は、これぐらいの英語ならなんとかなりそうね。じゃあ、サビパートからいくよ！」
「あたいろーま字ぐらいわかるよ！ よーし、あたしのうたを聴けーーー！！！」
『Mighty warrior ！』
『Fo za reeegeeend raaaido agen ！』
『From the hills for peace and love to the sea of gold ！』
『My land must be freeeeee...』
『（Maaai raaando maaasto biii furiiii ！！！）』
『……妖精、私とデュエットするなら、まずその英語を何とかしないと……』
　……問題山積である。
　チルノは、ミスティアに連れられ森の人形遣

音が出せる位置がある事も習った。
　ベースでは、四弦等の低音弦を親指で上から叩くように鳴らし、同時に別の指で一弦等の高音弦を引っ張ってはじく様に鳴らすスラップ奏法。
　弾く指を人差し指と中指だけではなく、三本使って単純に手数を増やすスリーフィンガー等を習った。勿論、薬指では弾きにくいし、速く弾ける分押さえる方の手の動きも難しくなる。
　それらの事をアリスは、即興のフレーズを奏でていく中でなんでもない事の様に次々と繰り出していく。柔らかく力の抜けた運指で、軽やかに正確に高速で。
　チルノ達は、上手すぎて何をやってるのか分からないレベルである。職人技たる指の器用さだ。
　それを見て、これが上手い奴の演奏か！　と、益々モチベーションを上げるのであった。
　そんな事を習いながら、チルノは英語の勉強である。
　日本語にない子音や母音の発音を覚えなければならないわけだが、彼女にそれを教える事が如何に至難か。読者の方々は想像に難くないと思う。
　アリスはとりあえず、歌詞に沿って出てくるパターンだけ付け焼刃で覚えさせる事にして、講義を開始した。
　こうして、チルノ達の英語兼ギター奏法教室は続く。
「th はθ！　舌先を上の歯の内側に当ててそこに息を吹き込む感じ。s は普通のスとかズ、自然にやって御覧なさい？　舌先は歯じゃなくて歯茎に当たってるでしょう？」
「wait はワイトじゃなくてゥエイトッ、aueo は読み方がいっぱいあるわよ。何その顔？　覚えるんでしょ？　v はブィじゃないヴィ。b は唇で『ブ』、v は上の歯を下くちびるに当てて『ヴ』。そうそう。で、その brave の a はエィ。time の i はアィ。語尾が母音子音 e の並びになってたら、e は読まずに二つ前の母音の読みがアルファベット読みになる。ローマ字と違うから覚えなさい？」
　自分のギターの練習もしながら、アリスは何フレットに叩きつけたり、戻る動作で弾いたりして音を出すタッピング等。
「そうそう、そんな感じ。それを、もっと速くやると速弾きになるわ。手が覚えるというか、慣れの問題ね。練習してれば、そのうち出来るようになるはずよ。ただ、本当に大事なのはリズムキープ。リズムがしっかり取れるようになってからでないと、速弾きも何も始まらないの。」
　また、演奏を個性的かつ印象的に聴かせる手段も教わった。
　なんだかんだで、聴き手が音に最も引き付けられるのは、音程が外れた瞬間なのだ。だから、鳴らした音の音程をずらす動作が、そのまま表現力につながる。
　左手で押さえた弦を、キュッと引っ張ってズリ上げたりして音程をずらすチョーキング。
　同じような動作で、弦を抑えた指、手首、腕を上下、左右に震えさせて音を揺するヴィブラート。これは、歌を歌う時でも多くの人が使っている、声を震わせるあれと同じだ。
　ギュゥーンと、弦を押さえた指をそのままフレット上で滑らせていく事で、音が鳴ったまま音程をずらしていくスライド奏法。
　他には、大きな音を出しながらアンプの正面にギターを向けると、ハウリング音を上手くコントロールして、キュゥゥーーンと大きく高い

ミスティアの号令と同時に、
「ったぁ～～～！！」
「……ッ」
チルノが、大音声で悲鳴を張り上げピックを持つ右手をブンブン振る。同じく、大妖精も右手を握り込んで顔をしかめている。
二人の、親指と人差し指と中指の爪がジンジンと痛む。
親指の付け根もだ。
チルノの英語・ギター講座が修了してからも、彼女らは毎日、起きては練習食っては練習、寝るまで練習の日々を送っていた。
エレキギターの弦は、アコースティックギターよりは柔らかいとはいえ、それなりの固さはあるものだ。
それをｻﾞｶｶﾞｶﾋﾟﾛﾋﾟﾛと高速で上下に掻き鳴らす事既に数十日。
金属製の弦の張力に負けないよう、強く握り込んだピックからこの三本の指にかかる圧力は、半端な物ではないのだ。
もちろんそこだけではない。手首も、腕も、限界が近い。
「うぎぎ、ここ難しすぎ……。」
「チルノちゃん、とりあえずもっと簡単にして段々練習していこう？」
「ねぇ、この曲ドラム滅茶苦茶しんどくない？ 特に足……。」

度も何度も繰り返し、チルノに読み方と発音を教えてやった。
チルノは決して上達の早い生徒ではなかったし、覚えたと言っても怪しげだった。それでも、アリスは根気よくチルノに教え続けた。
チルノも、自分の勉強中アリスがギターに触れるのをうらやましく思いながら、我慢して英語を練習した。
アリスは人形達への命令の試行錯誤で、不出来な生徒には慣れっこだった。
だが、それは面倒な状況をいくらか楽にするマイナスの緩和条件でしかない。
時折様子を見に来ていたリグル達が見た、うぎぎぎと唸りながら必死で自分の教えについてこようと頑張るチルノに向けられるアリスの表情は、微笑だった。

～～～～～～～～～～～～～～

『『Mightyy wwarriorr for the llegendd rridde againn ！』』
「チルノー！ しっかり私の声を聴きながら歌いなさい！ 上手く重ねて和音が響くように音程を合わせて！ ほらほら音ずれてる不協和音になってる！ マジで集中して、献身的に相手に合わせる気が無いと、ハモりなんて一生バラバラのまんまよ！」
……そして、現在に至る。
「ほら、強めるとこはがなっちゃだめだって。前に声出しちゃだめ。喉の奥から頭のてっぺんの方に声を引っ張り上げて、突き抜けるように響かせる！！ そう、頭と上半身に共鳴させて、体の周りの空気全体に響かせるの。いくよ～！
『from the hills for peace and love to the sea of gold…』
『『my land must be free』』
ほら、今きれいに重なって響いた！！」
そこには、何とか演奏を形にしようと、六人で森の空気を震わせるミスティア・チルノバンドの姿があった。
「おっけーストーップ！！」

まぁ、歌いながら串焼いてたりもするので、変わってないっちゃあ変わってないのだろうが。
指が死にかけている弦楽器組は本日の作業は免除され、ルーミアとリグルが作業に駆り出される。リグルも、スティックを持つ手首は既に腱鞘炎気味なのだが……。
最近は、ミスティアの料理は専らバンド面子で消費されるのが恒例となっている。
ビールを飲み、串焼きかっ喰らい、うな丼掻き込み、六人は笑う。
この数十日余り、ほぼ全員が体のどこかを痛めながら、苦しい練習を続けている。
皆、朝から晩まで一日、演奏時には必死の形相だ。互いに意見も衝突する。文句もいい合うし、時には怒声が飛ぶ。
それでも、こうして食卓を囲み団欒の折には、みんな笑顔だ。
一見矛盾するかのようにも見えるこの一日。
「おっしゃー！ 一曲ひきまーーーす！！」
酔った勢いでさっきの痛みも忘れたのか、チルノがギターをしょって何やら弾き始めた。
それは、いつも弾いている曲のソロパート。
所々簡単にしてあるが、ちょくちょく彼女のオリジナルなフレーズがいくつも噛ませてある。
本当に、彼女の頭の中には今やろうとしている曲達の事しかないらしい。
「あ、チルノちゃん！」

リグルも、バタバタドコドコと連打するパートが続くツーバスやタム・スネアを打ち鳴らす手足の疲労が、限界に近いらしい。
ドラムというパートは、激しく喧しい曲では、強く叩く筋力はもちろん、実はライヴで数曲をずっと叩き続ける持久力の必要なパートでもある。
「ツーバスかっこいいよ！　あたいったら最強ね！」
そういって笑うチルノの顔も、どこか引きつって見えるのはリグルの気のせいであろうか。
「チルノも、そのフレーズ本当に弾けるの？」
「あたいったら……無理かもね！」
ニカッ、と口元を吊り上げたチルノ。目が、笑っていない……
その瞬間チルノの拳から、意図せずポロリッ、とピックがこぼれおちてしまった。
もう、握力も残っていないのだ。
「お～ぅ、結構みんな限界みたいね。私も過呼吸っていうか酸欠っていうか喉が……じゃ、今日の練習ここまで！」
ミスティアの一声で、本日のセッションは終了。
「うっしゃーさ～け呑む～～～！！」
誰からともなく、夜食への興味が叫ばれる。
「んじゃ、今日も屋台の仕込み手伝ってよみんな！」
そう、ミスティアは週数日は屋台と兼務なのだ。

―――――――――――――――――――――

そして、またまた古典的表現として月日は流れ、神社の演奏会までついに一週間を切った１２月２４日。
「紅魔館で演奏会？」
チルノのもたらした情報に、リグルがクエスチョンマークを返した。
「私が取ってる新聞に載ってたのよ。年末の神社に対抗してるのか知らないけど、紅魔館の吸血鬼達が楽団を組んで、私達と同じように山の巫女さんに教えてもらった外の世界の曲をやるんだってさ。しかも今日。」
眼鏡をかけたルナチャイルドがバサバサと振った、自宅から持ってきたであろう新聞には、確かに紅魔館で演奏会をやる旨が煽り文句たっぷりに書きたてられている。
「と言う訳でチルノちゃんが、今日はみんなでこれを見に行こうって。」
「ライバルのじつりょくを見ておかないとね。てきじょーしさつってやつだよ！」
よくわからないタイミングでエッヘンと胸を張るチルノ。
「なるほど、確かにみんなこういうのを一回体験しとかないとね。そういうの、大事よ。じゃあ、今晩は紅魔館にオーディエンスとしてライヴ参加決定！」
夜雀の一声で、本日の深夜は悪魔の館の地下パーティーホール行きが決まった。
「それにしても、寒っ……」
リグルは蟲の妖怪。
寒さは大の苦手である。
分厚い生地の赤いチェック柄ブラウスの上に白系のセーター、これまた厚い赤系布地のスカートに黒タイツと着込みまくっている。
「ルーミアは、そんな真っ暗にしてて寒くないの？」

大妖精が声を上げる。
酒で血圧が上がっている上、勢いでピックを使わずに指で直接弾いたりしているためか、チルノの指からは真っ赤な血がにじんでいた。弦にこすって切ったのだろう。
そこに、ルナチャイルドも飛び出す。
弾くのを止めるのかと思いきや、自分もベースを持って一緒に弾き始めた。
よく見れば、いつしか彼女の手指には、いくつも絆創膏が貼られている。
ベースは、指で直接弦をはじいて弾く場合も多い。また、押弦する指もギターに比べて遥かに握力が要る。長時間弾き続ける事で指にかかる負担は、想像を絶するものだ。
慣れない演奏を続けた彼女の指は、この数十日で、いつしかあちこちマメや傷だらけになっていたのだ。
痛みも、やりにくさもあったろう。
それでも、彼女は弱音も文句も吐かずに静かに練習を続けていたのだ。
血を流し、指を腫らし、二人は笑っている。
その二人をみて、リグルも、ルーミアも、大妖精も、ミスティアも、夜空の下で楽器を握り、それぞれのメロディーを奏で始める。
今や誰だって、喉や、手首や指や、酷使した部分に疲労やけがを抱えているはずだ。
そんな痛みも気にせず、疲れてへろへろになりながら、みんな笑っている。
そう、一見矛盾する彼女達の一日は、きっと……

と、魔理沙は人ゴミの奥にグイグイと割り込み消えていった。
「それにしても、思ったより凄い人だね……。」
大妖精が、人間と人間に挟まれながらきょろきょろと不安げにあたりを見回している。「うらやましいじゃない。こりゃ激しい曲なら、始まったら覚悟しないと（笑）」
心配事を述べながら、一方のミスティアはワクワクした表情だ。
「あ、ＳＥが消えた……」
リグルがそうつぶやいたと同時に、パッ、パッ、パッ、と照明が落とされ、会場は完全に暗闇に包まれた。
ざわざわと雑談に興じていた客達の喧騒も、明らかに期待感をもったどよめきの声色へと裏返って行く。
開宴だ。

「Hear me now ！ All crimes should be treasured if they bring thee pleasure somehow...」

透き通った声で、やたらに流暢な英語のセリフが響き渡る。
っと言い終えると同時に、赤色のスポットライトがステージ全体を照らす。ダンダカダカダカダカと轟き渡り、会場という巨大な直方体全体をビリビリ振動させるフロアタムとバスドラ、それとそろって超低音の唸りを響かせるベースに、デリデリと不気味な不協和音を掻き鳴らすツインギター。そこに遅れて、ヴォーカルが先刻とは打って変わって悲鳴とも叫び声ともつかないまさに悪魔の咆哮を響かせる。
照明に真っ赤に染められたメンバー。
『Maleficent in dusky rose ！
Gathered satin lapped Her breasts ！
Like blood upon the snow...』
怒りとも苦しみとも表現できる、激烈な感情を吐き散らすようなヴォーカルは２パート構成となっている。
そのバックを、黒のドレスを纏ったレミリア・スカーレット。

ルーミアは、演奏練習時だろうが昼間は必ず闇で自分の周りを覆って光を遮っている。
「暗闇はなんで暗いと思う？ 光を吸収してるんだよ。吸収された光はそのまま熱になってるの。だから、暗闇の中は普通よりあったかいんだよ。」
暗闇の中から、声だけ聞こえる。
いつものことながら、なんともシュールな光景だ。
「今日は朝から分厚い雪雲で曇ってて、昼でもかなり暗いよ？」
「……さ、さむいのか～～～（泣」
開場は、吸血鬼らしく午後１０時と遅い。
それまでは一同、いつもの通り練習に時間を費やす事にした。
最近は、舞台でやる曲の順番と語りの入れ方。
曲間で皆何しゃべろうか。演出はどうしようか。
冗談も交えながら、そんな本番ステージを本格的に意識した、しかも楽しい話題を交えての練習が続いていた。

～～～～～～～～～～～～～～～

「よっ、お前らも来たのか。」
午後１０時、紅魔館地下の大ホール開場。
いつも通り、幻想郷の人妖がぞろぞろと集まっている。
そこには、霧雨魔理沙の姿もあった。
「魔理沙さんも、見に来られたんですね。」
顔馴染みのルナチャイルドに、魔理沙は声をかけたのだった。
「まあな。大晦日と同じくブームの仕掛け人早苗のプロデュースだし、どんなもんやらせるか興味もある。それに、一回客として経験した方が、自分達の演奏にも経験を活かせる。お前達も、そのつもりで来たんじゃないか？」
ミスティア一同“うんうん”とうなづき、魔理沙も“うんうん”とうなづき返す。
んじゃ、私はあいさつする奴もいるから。

かべるフロントの彼女らからは、視線を引きずり込まれる圧倒的なオーラが発せられていた。
　それに、バックシンセとオーケストラの演奏は、ホラー映画の霧かかる夜の墓地や、悪魔の館そのものだ。
　そこに、暴虐的な高速かつ重低音の強調される不協和音を掻き鳴らすギター、ベースとドラム。
　メイド達による合唱やパイプオルガンの音まで響き始め、ホール内には本物の恐怖の感情さえ漂い始める。そしてそのあとは、むしろそれによる興奮が空間を支配し始める。
　本気だ。
　本物だ。
　そのライヴパフォーマンスの凄まじさに、チルノ達一同はすっかり圧倒されてしまった。
　これほど激しく高速の曲をこれだけの質で破綻なく演奏するには、どれほどの苦労が必要か。
　自分達のしてきた苦難の練習という過去と、今できるパフォーマンスを遥かに超えた吸血鬼達の演奏という、目の前の現実と。
　そして、それすら吹き飛ばしてしまう程の、問答無用の吸引力を持つこのステージの世界観と。
　自然と体が動き、頭が縦に振れる。激しいパートでは暴れすぎて、各人一度以上ふっと意識が遠のきかけた。
　そんな世界に酔いしれる内、重低音の暴虐と透明なオーケストラの美の絡み合う世界はいつの間にか過ぎ去っていった。
「Yeah ！ 私達の演奏聴いてくれてありがとう幻想郷の人間と妖怪たち！ 今日やる曲はみ

　メイン Vo. は、滅多に姿を見せない悪魔の妹、深紅の洋服に身を包むフランドール・スカーレットが務める。
　ツインギターはそのフランドールが黒のギターで片側を務め、レミリアが真っ赤な蝙蝠を模した様な形のギターでメインを奏でる。
　ベースは、悪魔のメイド十六夜咲夜。
　黒に赤い十字のラインが入った、トゲトゲしたロングスケールのベース（サイズの大きくネックの長いベース。ネックが短いショートスケールと呼ばれるタイプもある。）が、長身に映える。
　その後ろで、度々速度を変え、時折電動ミシンか工事現場かというようなﾀﾞﾀﾞﾀﾞﾀﾞと聞える程のあり得ない高速で、かつパワフルなドラムプレイを見せるのは門番妖怪紅美鈴。
　帽子を脱ぎ、黒のチャイナドレスを着こなした彼女からは、普段のイメージとは一風違うカッコよさがにじみ出ていた。
　演奏のバックに、冷水の様な、夜霧の様な、冷たい質感の音を重ねるのは、キーボード奏者パチュリー・ノーレッジと、紅魔館メイド部隊のオーケストラに、それを指揮する地下図書館の小悪魔。
　金切り声とも表現できる高音のフランドール、唸り声と表現できる低音のレミリア、２人のデスヴォイス。
　普段の彼女らの容姿からはつい忘れそうになる、恐怖の象徴である悪魔の声そのものが表現されている。
　時折見せる、か細く甘い囁き声の様なパート。響き渡るような甘い女性的なクリーンヴォイス。鋭い牙を剥き出しながら悪魔の微笑を浮

客席の遥か後ろに送る。そこには、先ほどから照明のオンオフを手掛ける妖精達の姿があった。
　そして、一瞬の暗転の後、ギギィ〜と思い扉の開く様な効果音と共にパッとステージ全体が照らされる。
「お前も蝋人形にしてやろうか！！」
　ツインギターの一角、アリス・マーガトロイドがステージからオーディエンスを指さし一声。重ねて魔理沙のギターがイントロのリフを奏で、ドラム・ベースに次いでアリスもユニゾンを奏でる。
　先ほどの、紅魔館メンバーの暴虐的なサウンドとは違い、ヘヴィーに歪みつつもスピードは抑え気味で、大分クリーンな音だ。
　ギターは魔理沙・アリス。ベースは先ほどに続いて十六夜咲夜が務めている。
　どこからどうやって連れて来たのか、ドラムは冥界の少女剣士魂魄妖夢が叩いている。ＳＥやバックシンセ等、味付け程度ながら曲の音響に広がりを与えるキーボードは、彼女が普段入り浸っている博麗神社の巫女だ。
　そして、ヴォーカルは魔理沙とアリスがツインで努めている。
　セリフを交えつつ、誘拐された少女が連れ込まれた館で蝋人形にされるという怪しげなストーリーを、いやに陶酔した表情で奏でるアリス氏。
　入り込んでいる……。
　さっきの吸血鬼に続いて凄い入り込みっぷりだ。
　かつて師事したチルノや大妖精すら、『怖い』と思った。
　しかし、アリスほどではないようだがそれとツインリードを奏でる魔理沙も上手い。先ほどの吸血鬼の演奏もさることながら、明らかにチルノ達のクォリティーを超えている。
『生きたまま蝋人形の如く　震えて眠れ 明日はもうないさ……』
　その一曲もすぐに終わり、舞台は暗転。
　ピンスポットの下には、再びフランドールが立っていた。
「今の曲は、外の世界で悪魔がやってた音楽んな、この前山にできたっていう神社の新しい巫女から教わった曲だよ！ 吸血鬼みたいに血を吸って若返ろうとした人間がテーマらしいよ、生意気だね！」
　本物の吸血鬼、フランドールによる曲間のＭＣはなるほど、ここまで真に迫ったライヴが出来る理由を示していた。人間が、吸血鬼の恐怖を描いた曲を、本物の吸血鬼が演奏するのだから。
　それにしても、これほどもまでの曲を自分達の物にする力。
　彼女達の妖怪としての強さや魔力、配役の適合だけでは決してない。語られざる、努力があるはずだ。
「次は、いっつも紅魔館に入り浸ってる招かれざるゲスト！ 新しい巫女の持ってきてくれた曲を私達に教えに来た、白黒の人間。霧雨魔理沙！！」
　そう言うが早いか、スポットライトの下にはフランドールに代わり、魔理沙が登場した。
「ちょっと！ さっきは、今日出るなんて一言も言ってなかったのに。」
「しかも、魔理沙が吸血鬼にこの曲教えたって。」
　さすが白黒。さっきと全然話が違う。
　スポットライトは彼女だけを照らし、ステージの後ろでは人影が百鬼夜行。
　魔理沙の集めたメンバーが、演奏の準備の為楽器の調整を行っているのだろう。
「あ〜、あ〜、妹様にご紹介にあずかった、霧雨魔理沙です。」
　思いのほか、魔理沙は緊張した面持ちだった。
『です。』だなんて、チルノ達は柄にもないと思ったが、彼女にとって里の人間を大勢目の前にする事は、そうあることではないのだ。
「あー、今日ここでは一曲だけだ。私達やフラン達の曲に興味があったら、あーどうか、大晦日博麗神社に来てくれ。絶対満足させるぜ！」
　思った以上にぎこちなく、たどたどしいＭＣを終え、不気味な風の吹き抜ける様な効果音と共に、演奏の準備が整ったという合図魔理沙が

『Bastard X'mas... 待ちこがれてた 夢を叶える日が やってきたよ
安らぎの歌も 最後まで聴けぬ Ah, Just make love and die ！』
『Merry X'mas ！ Hahahahahahahahaha ！！！』
最後は、フランドールのセリフと笑い声で幕。
姉妹でスカートの裾を持ち上げ、そっと一礼し舞台は暗転。終演を迎えるのであった。
会場は、拍手と歓声に包まれた。
チルノも、リグルも、ミスティアも、ルナチャイルドも、みんなごく自然に拍手を重ねた。
拍手も歓声も、何分たっても止む気配を見せない。それどころか、いつしか次第に統率がとれ、一定のリズムで会場全体が拍手と歓声のリズムを刻んでいた。
まだ足りない。
終演は認めない。
もっと、楽しませてくれ。
そんな、会場全体の意思が、そうさせたのだろう。
本当のマナーにのっとった、アンコールだ。
と、バシッと衝撃音がし、会場全体が突如暗転。
期待と不安にどよめく会場に、ゆっくりと一本のギターの旋律が聞こえてきた。
ステージから一筋の小川の様に流れ出すその切なげな旋律は、やがて会場全体に広がり、それに触れた者達のどよめきを、次々に歓声へと変えていった。
そして、フランドールの物と思われる静かな英語の独唱が追走し、フェードアウトそして……

『『紅だーーーーーー！！！！』』

アンコール。
二人の絶叫と爆発音の如きバンドサウンドで幕を開ける姉妹のツインギター劇場。煽情的な旋律を載せて、スネアにタムにツ―バスを連打し爆走するドラム。
聴衆の興奮は、静寂から一気に最高潮にまでなんだって。なんとその悪魔、１０万歳以上！そんな大先輩が、外の世界にまだ居たなんて。ね、お姉さま。」
「そうね、幻想郷に来たら、ククク……歓迎するわ。」
「じゃあ私達も、その悪魔の曲で最後の一曲！ お姉さまが歌うよ！ 悪魔の館にようこそさようなら！ Merry X'mas! ！」
その一言と同時に舞台はもう何度目かの暗転。
そして、ピアノの旋律と共に会場全体に雪が舞い始めた。
どよめくオーディエンス。
冬真っただ中。
幻想郷で降雪など珍しい事ではないが、ここは屋内である。
おそらく七曜の魔術師パチュリー・ノーレッジの魔法であろう。
チルノは大はしゃぎ、寒さに弱いリグルも盛り上がった雰囲気で体は火照り汗だくになっており、その寒さは気にならなかった。
ぼんやりと、淡いブルーのライトに照らされた舞台。
ギターはアリスと魔理沙、ベース咲夜にドラム美鈴と、ハイブリッドなメンバーによる演奏。
そして、フランドールの甘酸っぱく少女っぽい声質とは少し違う、レミリアの小さい体に大きく響く歌声が、バラードで空気を震え渡らせる。バックコーラスにフランドールも加わるようだ。
『怪しげな～煌きが～街を包む Holy Night
破滅への～秒読みが～鈴の音に消され……』
今夜初めて、クリスマスらしい歌詞の曲。
『神の貞操は 既に奪われた 十字をかざす聖人に……
Merry X'mas... それは～なん～のひ～』
しかし、これは悪魔のメリークリスマスである。聖人にささげる祝福など、あるはずもなかった。手空きのフランが観客を煽って、サビ頭の『Merry X'mas...』をシンガロングさせようとしている。
繰り返すサビの合唱が、ホールに響く。

「あっちこっち行ったらしいんですよ？ 迷いの竹林に、なんと死後の世界にも。私も付き合った幻想郷のはじっこでは死神と喋れたんですけど、死神の目ってホントにあったんですねぇ。」
　そこでは、今日にいたるまでの魔理沙の苦労話が聞けた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「私が……ドラム？」
「あら、面白そうじゃない妖夢。是非やってみたらいいわ。」
「私も、面白いと思うわ。折角、新しい文化が幻想郷にもたらされたのだから。」
　ここは、冥界の白玉楼。
　魔理沙は、こんなところまでメンバーを探して右往左往していたのだ。
「パチュリー誘おうとしたら吸血鬼がもってっちまってな。まあ、ドラムは体力が持たんと思うが。アリスは私とギター、霊夢は楽だからとかってキーボード、ベースはどうせお嬢様に付き合うんだからって咲夜が兼務してくれる事になったんだが、ドラムにどうしても適任がいなくてな。真面目で根性あって棒を二本持ってる奴って考えたら、お前を思い出したんだ。」
「な〜んか若干釈然としない物を感じますが、幽々子様や紫様がそう仰られるのなら。」
「やったぜ！」
　魔理沙は、ようやく演奏できるめどが立ったと大喜び。
「ふむ、せっかくの機会なのだし、親睦を深める意味合いも込めて、私達もなにかあの風祝りに見繕ってもらいましょうか。ねぇ藍？」
「……紫様。そうやって、幻想郷の管理を仰せつかっているわたくしめの仕事を、増やして下さるわけですね。」
「……紫様。そうやって、白玉楼のお世話から魔理沙の手伝いまで頼まれている私の仕事も、増やして下さるのですね。」
「……紫。そうやって、もみじ饅頭を食べ達する。
　ヴォーカルラインよりも感情的なツインギターのユニゾンするメロディー、それをしっかりサポートして持ち上げるベースライン、長い髪を振り乱しながらダカダカと連打に次ぐ連打で、迫力とスピード感を増すドラム。その音を、ホール全体の空気に浸透させるバックのシンセ音。
『紅に染まった　この俺を　慰める奴は　もういない
　もう二度と届かない　この思い　閉ざされた愛に向い　叫びつづける
　Oh, Crying in deep red ！』
　最後に、駆け上がる様なツインリードギターの旋律で、今宵の宴は終わった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「いやはや、思った以上に緊張したぜ。」
「でも、思ってた以上に凄い出来でした。本物の吸血鬼と聴いて期待はしていましたが、頭振りすぎて首が痛くなりましたよ。」
　魔理沙と、傍にはやはり来場していたらしいプロデューサーとの紹介があった早苗。
　舞台が終わった後、紅魔館では普通にパーティ。
　流石に人間の姿は少なくなった中、ミスティア達が、数少ない人間である魔理沙達を捕まえて詰問している。
「出るなら出るって、言ってくれたらよかったじゃない。」
「何を言ってる。先に言ったら驚きが無いじゃないか。人生に彩りを与えるのは驚き。ライヴはインパクトだぜ。今日の吸血鬼のあれ見たろ？」
　確かに、凄いインパクトだった。
「しかも、吸血鬼に曲を教えたのは魔理沙だって……」
「ああ。いやー調子に乗ってあっちこっちにメンバー探して曲を聞かせて回ったら、何やら大反響でな。」

かべている。
「文さん、むふふもいいですけど練習もしてくださいよ？」
　早苗の楽団のベースは、非番の銀髪哨戒天狗、犬走椛。
「そっか、神社って事は、人間の前で演奏するんだ……ドキドキ」
　河童の河城にとりがキーボード。
　早苗自身と射命丸文がギターヴォーカル。
　ドラムパートは、なんとにとりの操るでっかいキーボードが全て電子音で再現している。
　そう言った音を聞きなれている早苗以外には、殆ど本物と聞き分けられない程のリアルな音が鳴るのだから、驚きだ。
「さぁ、天狗の皆さんが非番の時間は貴重です。練習練習！ そういえば、日本の妖怪をネタにしてるヘヴィメタバンドもありましてですねぇ、ほら、烏天狗とか紅葉とかいう曲どうでしょう？ そうだ魔理沙さん、今度他の所にも教えに行きません？ 幻想郷には、鳳凰とかっていないんでしょうか……あ、鵺って曲も……

るのに忙しい私の楽しみを増やしてくれるのね。」
「「……。」」
　従者ふたりは大きなため息、幽々子はニコニコしながらもみじ饅頭を口に運ぶ。
　紫は妖夢の手入れしたもみじの紅葉をバックに、怪しい微笑みを浮かべていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『Bleeding works of art!! Seething work so dark!! Seering words from the heart!!』
「おおぅ、これがデスヴォイスか。現人神は凄いぜ。」
　デスヴォイスとは、先ほどのライヴでスカーレット姉妹が使っていた。俗に、咳払いする時の様な発声方法、裏声を出す喉を細く潰したような発声方法等で喉を振動させ、濁った発声をするものだ。
　悪魔の叫び声をイメージしたものでもあるらしく、強い怒りや悲しみなどの激しい負の感情、不気味さや汚さ、痛みや苦しみなどを表現する。
「外の世界はストレスが多い世界でして、これぐらい攻撃性の強い音楽が結構あるんです。こんなのでも、ちゃんと音程とか表現力とか個性があります。日本ではあんまり表だって流行ってませんが、外国ではそういう曲がヒットチャートに乗ったりするんですよ。日本でアンダーグラウンドなバンドも、外国で有名だったりしますし。私はカッコイイと思います。」
　黒いＶ字型のギターをしょっていて、凝ったのだろう左肩をぐるぐる回し、ピックを持った右手と、デスヴォイスで酷使した喉を交互にさすりながら、早苗は魔理沙に外の世界の音楽事情を説明したが、魔理沙に彼女の心情が理解できるはずもない。
「なるほど。一旦流行を作ってしまうと、記事ネタがバンバン出てきますねぇ。こりゃあ、発行部数大幅増が期待できそうですむふふ」
　清く正しい新聞屋は、実に汚らしい笑みを浮

に腰をおろした。
　しばらく、二人はそのまま座って静かな湖のさざめきを聞き、それに映る星を眺めていた。
　ライヴ前に西の空に傾いていた半月は、とうに沈んでしまっていた。
「……なんか、よくわかんない……。」
　ぽつりとチルノが、風に揺れる草葉の擦れる音に混じってしまいそうな、小声を絞り出した。
「うん……。」
　リグルは意味のある言葉は選ばず、静かにうなづいて続く言葉を待った。
「あいつら……練習始めたのは同じぐらいのはずなのに。なんで、あんな上手いのさ……」
「うん……。」
　さぁっと風が、冬枯れに僅かに残った木を、草を、二人の髪をなでていく。
「あんなに皆を引き込んで、凄い演奏して……どうやったって、あいつらには勝てないもん……ずるいよ……。」
　つめたくて、柔らかい風だった。
「もう、だからなんだっていうろう私……。どうしたらいいのか……なんなの……？ ほんとに、わけわかんないっ……！」
　そのつぶやきを最後に、チルノは俯き自分の腕と膝に顔を埋めてしまった。
　またしばらく、二人はそのまま静かに並んで座っていた。
　寒さが少し、強くなった気がした。
　やがてリグルが、おろした腰をずりっとチルノに寄せ、膝を抱く握り拳を取って、両手を合わさせた。
「ん？ リグ……」
　そして、にっこり笑って……、
「……あだっ！ あ゛だだだだだぁあ゛ぁぁああだぁあ゛ぁぁぁ〜〜」
　上からぎゅ〜〜っと握った。
　チルノの指は当然、今日もギターの弾きすぎでジンジンしている。
　リグルは特別強く握りしめたわけではないが、当然指には激痛が走る。
「だっ、でっ、なんっつーことすんのよアホ！ ⑩！ 公式馬鹿３号！ 究極嗜虐昆虫！ Ｇ！ 男お、百の鬼が夜を行く！」
「ひゅい！？」
「巫女と言うのは、暇を持て余すのが仕事なのでしょうか……今度コラムのネタにいたしましょう……」

――――――――――――――――――――――――

「いやー、何処から声出てたんだろうねありゃあ。」
　深夜の森の練習場。
　ライヴ参加で消耗した体力を補おうと、パーティで夜食をバカ食いしたルーミアは、（闇の中で）毛布にくるまり幸せに睡眠中。
　大妖精も眠気を抑えられず帰途に就き、夜が本来メインの活動時間帯なミスティアと、同じく夜に動く事のあるルナが、本日のライヴの感想をあれこれと交わしていた。
　そんな仲間たちとは少し離れ、チルノは広場にほど近い小高い丘の様な地形の頂上に、独り座っていた。
　少し斜面の木が空いており、じめじめした森には珍しく、小さな草っぱらになっている。
　湖と空と、遠くに小さく紅魔館が同時に視界に入るなかなかの景勝ポイントだ。
　そこで一人、膝を抱えた腕に顎を置き、静かに湖を見下ろす氷精。
　メランコリックが服を着て、羽根をはやしている。
「そんなとこに居た。何してるのチルノ？」
　現れたのは、これまた夜に強いリグル。
「……何もしてないことぐらい、見たら⑨でもわかるんじゃない……？」
　湖の上で、後ろ姿の自分の写真の右下に描かれた数字を、未だ引きずっていたらしい。
　だが、ぶすくれている理由は今更そんなことではあるまい。
　リグルは、寒さを我慢しながら、チルノの右

「私たちは弱い。大した事も出来ない。ちっぽけだよ。そう自覚するときの不安、心細さ、情けなさ、怖さ。自分より小さい蟲や使い魔を連れてる私だもの、少しはわかってるつもりだよ。」
　そう言って、リグルはチルノに向き直った。
「痛いなら、つらいなら、もっと自分の痛みを信じてもいいと思うよ。その痛みが、自分は誰にも負けないぐらい、今を楽しんでるって証拠なんだから。」
　ずっとチルノの手と触れ合っているリグルの手は、既に冷え切っている。
「自分の痛みを、信じてチルノ。君がやりたいことを、精一杯楽しんでやればいい。上手く出来なくても、誰かにたどり着けなくても、一生懸命に、君が今感じている事を、本当に思っている事を表現すればいい。いつかきっと、誰かに伝わるから。」
「リグル……ッ！」
　わかった。
　わかったからもういい、離れて。
　私のそばに居るのは、寒いでしょう？
　辛いでしょう？
　あんた、寒さは苦手なのに。
　自分に密着するリグルの肩に、引き離そうと手を置いてチルノが継ごうとした二の句を、リグルは一言で遮った。
「信じてチルノ、私の辛さを。私は、君の後ろでドラムをたたくのが楽しいんだよ。」　氷精に付いていた氷が、ひとしずく。
　融けて、流れ落ちた。
　リグルは、顔を上げようとしないチルノの頭を、その表情を見てやらない様に、そっとその胸に抱いた。
　氷精はもう何も言わず、押しのけるために置いた手でそのままその肩を掴み、冷たい顔を、柔らかな胸にうずめた。
　二人だけの、静かな世界。
　誰かが落ち込んでいる時に、かける言葉。
『大丈夫。』『気にするな。』『がんばって。』
　そんな慰めの言葉に、何の意味があるだろう。
　言葉は決して、彼女の中にある哀しみや苦しの娘！ ギャルゲー（笑）！ 人気投票４１位（阿求の下）！ このショタコン共め！ 触角とったら誰だかわかんないぞ！！」
「ち、ちょっと……」
　後半の幾つかの表現は、記者会見を開いた上で、文書で正式に抗議を申し入れたい。というより、ここにきて読者の九割五分を敵に回した悪寒。
「で……思い出した？ ……その指の痛み。」
「……リグル？」
　ジーンと痛み続けるチルノの指先を、掌で優しく包んだまま、リグルは静かに言葉を紡いだ。
「ずっと、考えてた……。私たちは、どうして、何のために、こんなに必死に楽器の練習してるのかなって。」
　チルノは、今は優しく自分の手を包む、リグルの手を見た。
　物を持つのに慣れていなかったであろう彼女の左手には、人差し指の第二関節付近の親指側と手首、スティックが当たる二か所に大きなマメができている。
　硬いシンバルやスネアを何度も強く叩くスティックからの負担は、軽くは無かったのだ。
　ただでさえ寒い、零下に達しているであろう気温の中、冷たい妖精である自分に密着するリグル。
　元々寒さに弱い彼女は、微笑みながら、カタカタと体躯を震わせながら話しているのが、触れ合っているチルノには伝わった。
　それでも、リグルは何も言わずにこの位置関係を維持し、湖の上の星空を見上げながら喋った。
「私は、たまんないぐらい寒いこんなところで、たまんないぐらい痛い手で、練習を続けてる。それは、それ以上にたまんないぐらい、チルノ達と演奏するのが楽しいからなんだよ。」
　チルノは、恐る恐るリグルの顔を見た。
　言葉に合わせて吐く息は白く、死の季節への体温の抵抗を証明する。
　寒さに震え、時折ぶつかる歯の根のカチカチと言う音が不自然な程、その横顔は穏やかな微笑み。

スティアの、回想。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『ちょっとちょっとちょっと、ずれてるずれてるストップ、ストーーーップーーー！！！』
　ミスティアのけたたましい制止が、森の空気の振動をかき消した。
『うぎぎまた間違ったもーー！ なんなの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？？』
『チルノ、妖精は死なないけど本番大丈夫なの？』
　どうも一か所克服できない運指があるようで、チルノの演奏が時折そこでつっかかる。
『大丈夫、なんたってあたいは最強妖精！ 演奏が止まらないぐらいにはやって見せるよ！』
『お願いしますよ妖精さん。吸血鬼のライヴの後、リグルに言われたこと思い出して頑張りなさいな。』
『まっかせなさ……ん……？ え……？ えぇーーーっ！！！ お、お前らあの夜のこと……』
　ミスティアは、ニカニカと白い歯を見せながら、リグルとチルノを見ている。
　眠っていた大妖精とルーミアは、キョトンとしている。
　チルノは、あの時確かにもう一人起きていた、月光の妖精を振り返る。
『……ゆうべはおたのしみでしたね（ニカッ！）』
『わっ、わーーーーっ！！！』
『え、チルノちゃん……ポッ』
『チルノ……食べてもいい妖精？（性的な意味で）』
『ぬわーーー間違ってるよーーー！！！』
『ん、んじゃ、も、もう一回いくよー……１・２・３・４…』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

みを、癒しはしない。
　誰だって、結局一人で生きて死ぬんだ。
　それでも、あなたが不安に負けてしまう時、悲しみに沈んでしまう時。
　帰ってきて。
　安心して。
　私はいつでも、あなたを受け入れます。
　誰かの居場所を作れるのは、脳の電気信号からひねり出す言葉じゃない。
　触れ合う温かな肌だ。
　この世の誰よりも助けを必要とする、一人では生きられない赤ん坊。
　言葉は通じない赤ん坊。
　泣いている赤ちゃんをお母さんは、何も言わずに優しく抱きしめる。
　ああ
　これで
　やっと私は
　一人じゃなくなった。

　……間もなく冷たい二人の背中に、
　東の方から、
　僅かな、明るい温もりが降り注いだ。

――――――――――――――

　２００９年１２月３１日＿午後０７時１１分

　チルノ達は、表の宴会の喧騒から少し離れた、博麗神社の裏に居た。
　リグルは、ペン回しの要領でくるくるとスティックを回転させながら、頭の中で曲のシュミレーションをしている。
　チルノや大妖精達も自分の楽器を持って、同様のイメトレを重ねているようである。
「いやー、昨日のリハ前の練習は酷かったからねー。」
　そんな事を、演奏当日も直前になって話すミ

てくれたおかげで、ルーミアのキーボードでは足りないバックのオーケストラ編成の演奏は、予定に沿ってテープで流してもらえる事になった。
「うぅ、緊張するなぁ……呼吸が苦しくなってきた。」
ルナチャイルドは、目を泳がせながらつかえた胸をトントン叩いている。
「今更、後には引けないさ。」
リグルが、そんな面子を鼓舞する。
「っし！ 暴れるぞーーー！！」
「チルノちゃん、床のスピーカーに足乗せるなって河童さん達に……」
大妖精の言葉を聴いているのかいないのか、チルノ・ミスティアは早速ステージに飛び出していく。
「まったく……。私達も、行こうか。」
リグル、ルナチャイルド、ルーミア、大妖精も後に続く。
暗幕と反響板で仕切られた、宴会場の喧騒からは暗く静かな舞台裏。
舞台サイドの通路から表に出る瞬間、ぶわっ！ と明るい視界が開ける。
光に加え、妖精どころか人間でも数えきれない群集とその声が、一気に彼女達を押しつぶしにかかる。
舞台の照明自体は切られていて暗いのだが、夜なお明るい会場の客との間に遮るものは無い。
暗がりの中とはいえチルノ達が出てきた事で、その聴衆のざわめきは一際大きくなった。
マイクスタンドの位置と高さをいじり、音響を確認しながらミスティアが、後ろのメンバーを振り返る。
「なんだか、ホントに緊張するね……！」
会場の照明で逆光になり、暗く影に埋もれたその表情は、言葉の割には活き活きと輝いている。
チルノ達は、会場の遠くに見える河童の仮設運営室に手を挙げて合図を送る。合図が帰ってきてから、ギターに、アンプに、シールドのジャックを刺す。ジャコッと気持ちのいい音がした。

「あー、本当にひどかったわ。さいきょうのあたいの心がへし折れるぐらいにはねー。」
その後、リグルと二人してさんざいじられたのだが、いよいよ迫ってきた舞台への緊張をほぐす、いい骨休めになったのではなかろうか。
リグルは、むしろそのためにミスティア達がわざわざ取っておいた話題だったのではないかと思い、反撃は殆どチルノに任せていた。
お前も訂正しろとチルノにぽかぽかやられたが、私が何言っても説得力無いじゃん。と、ますます事態を泥沼化させ、どちらかと言えばむしろ渦中の氷精を翻弄する側に回っていた。
そして現在のバンドは、神社の裏でステージへのお呼ばれを待つ段階に有る。
魔理沙・早苗の鬼畜タイムテーブル構成により、見事に彼女らがトップバッターを務めさせられている事を、彼女ら自身が知ったのは昨日。
そして今、河童の音響機器の調整が遅れいるとかで、彼女らはステージに上がれずにいるのだ。
ステージは、神社の本殿前にデデーンと設置されている。
音響やスペースの関係、何より敷地の中央と言う事で、当たり障りなくここに作られた。
地面より１m以上高いステージに機材や照明塔、ステージ後方にそびえる反響板等に、年越し時に本殿が隠れる。と巫女は多少渋ったが、興行収入の話が出ると３秒で折れた。
『それじゃあミスティアさん達、スタンバイお願いしまーす。』
何処からか、そのステージの設営と運営を任されている河童達の、呼び出しの声が聞こえた。
河童達は、遠距離同士の連絡にもスピーカーを使っている。
会場も、紅魔館とは違って屋外。
外来人の早苗も、音響や機材配置に関しては全く疎く、河童達の力が必要と言う事で、早苗が今日の会場のセッティングを依頼したのである。
その河童達に、以前楽器を教えた時からチルノ達を心配していたプリズムリバーが話を通し

しい世界があった。青々茂る森、輝く湖、雄大な山、そこは妖精や妖怪や天狗や鬼や妖獣達が住む土地。長く平穏を保ち、英知と平穏と繁栄を受け継いできた。その偉大な世界は、『幻想郷』と呼ばれていた。」
リグルは、思わず噴き出しそうになった。
打ち合わせていた、元の外の世界の曲の内容が、書きかえられている。
見ると、ルナチャイルドと大妖精は目が泳ぎ、ミスティアはニヤニヤと笑いながらこっちを見ている。
またお前か。
「そんな理想郷たる幻想郷だったが、かつて『吸血鬼異変』と呼ばれる大きな戦争があった。邪悪な外界から湖のほとりに、悪魔の軍勢が現れたのである。悪魔は強大な力を持ち、平和に緩んだ幻想郷の住人たちを、次々と倒して味方にしてしまった。」
バックの音響に合わせ、赤いスポットライトが予定通りに舞台を染め、過去の戦いの凄惨さを演出する。
「吸血鬼達の急襲に幻想郷の妖怪の賢者たちは集まり、同盟軍を結成して吸血鬼達と全面戦争に突入した。そうして『魔法の森』にて、ついに賢者たちは吸血鬼を打ち負かし、吸血鬼に幻想郷に住む上での絶対の約束をさせ、戦いは終わったのです。」
ここで、語り部はミスティアに移る。
「しかし、月日は流れ時は現代。悪魔は再び甦ったのです！」
『バシーーーーーン……！！』
と、実にわざとらしいシンバルは、ルーミアのキーボードの役目。
「人間の里は、既に悪魔の発した赤い霧で満たされ、人々は騒乱の最中に！ 悪魔の霧を操るのは吸血鬼レミリア。長い時の果てに暇を持て余し、以前よりも遥かにどうでもよく、しかし迷惑な異変を起こしたのでした。」
リグルは、会場をちらりと見遣る。
吸血鬼が、怒ってやしないだろうか……
「悪魔は、『霧の湖』の城に住んでいました。強大な力を持つ彼女を倒せるのは、幻想郷の伝説に伝わる、持つ者に永久の栄光と強大な力を

アンプ・スピーカーの繋ぎ方、電源の入れ方、外し方にはしっかり手順がある。一つ間違えれば、それだけで壊れてしまう程音響機器はデリケートな機材なのだ。
それも、数か月前と比べればもう慣れたものである。
そうしてギターとアンプを繋ぎ、
『ジャーーーン！』
ギターの音の大きさや音色をチェックし始めた。
大妖精の方は、もう汗をかいている。
「だよね、私たち妖精なんて、人間や妖怪に見つかるたびに逃げてるもの。自分から出ていくなんて、滅多にない。」
ルナチャイルドも、強がり笑みを浮かべてはいるが、どこかしら表情が硬い。
「さあ、そろそろかな。」
リグルも、スネアやタムの音を気にしながら、舞台に置かれたドラムセットを自分がいつも練習している位置に調整し終えた。
「Are you OK？？」
そう聞いたミスティアが、サッと河童達に向かって手を上げる。
会場全体の照明が、サーっと暗転。
空気が、変わって行く。
少し前に経験した、紅魔館での会場暗転の時のどよめき以上の、異様な緊張感の中に、リグル達は包まれていった。
『お待たせいたしました、守矢神社 Presents、博麗神社年越しカウントダウンライヴ、メインイベントただいま開演でございます。』
河童のアナウンスと共に、
パッ！
と、チルノにピンスポット。
余計な事は言わない。
早速前奏の厳かなオーケストラ演奏が流れ始め、チルノの語りが始まる。
リグルも、チルノも、他の皆も、腹の底からかぁーーっ！ と突き上げてくるような緊張に、ぐっと生唾を飲み込んだ。
イントロが流れ出したのに伴い一旦静まった会場に、すぅっと、氷精が息を吸う音が＿＿
「……ある所に、聖なる境界に隔てられた美

私は勇敢に、自由に空を舞おう。)』

　ミスティアの、夜天へ広がり響き渡る朗々とした歌声。

『I'll stop your madness your thirst for blood
　to bring them peace where love must reeeeeign ！
　(我こそが、貴様の血に飢えた狂気を打ち負かそう。
　愛する者達の住まう地に、平和を取り戻す為に。)』

　ここから、演奏開始！
　ギターはザッザカとリフを刻み、ベースとドラムは一糸乱れぬ呼吸でリズムを取り、スピード感を上げていく。
　勇壮に突き抜ける様なミスティアの高音のシャウト。
　そして、このファンタジーな世界の演出に不可欠なのが、シンフォニックな音像の深みを作るキーボード。
　全員の音がしっかり一体になって、ステージを作っている。
　そして、サビのハモリとコーラス。
『『Mighty warrior ！』』
『for the legend ride again ！（伝説の最強戦士が再び駆ける！)』
『From the hills for peace and love to the sea of gold（愛する者の平穏を求め、丘を越えて黄金の海へ！)』
『『My land must be freeeeeee ！！（我らの郷は自由なり！)』』

　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『The poem of blood was written by them
　the dead now lying on the sand..."Please come on ！！！"』
　ミスティアが聴衆に向かってマイクとは逆の左腕を振り上げ、繰り返してきた最後のサビの与えると言う『スイカバーの剣』。しかし、伝説に伝わっているのはその剣の在り処を示すヒントのみ。これまでそれに従って剣を探しに行った者で、家族の元へ戻った者はいません！」
『バシーーーーーン！！』
　と、二回目のシンバル。
　静かに、しかし壮大に広がるバックのオーケストラ。
　荘厳で神聖な雰囲気のバックコーラスまで聞こえてくるが、全て河童が再生しているテープの音だ。
「しかし、この剣を見つけ出し、吸血鬼に立ち向かえる勇者が一人だけいました。湖の東のほとりに住むと言う、『氷の戦士』と呼ばれる妖精です。妖怪の賢者は、彼女を呼び寄せました。」
　ここで、セリフはルーミアに代わる。
　ルーミアはキーボードからゆっくりと離れ、見下ろすようにチルノの前に立つ。チルノは、芝居がかった大げさな仕草で、その眼前に膝まづいた。
「幻想郷において、最も勇敢にして偉大なる勇者よ。そなただけが、幾多の失敗を繰り返した伝説の剣を探す旅から、見事帰還する事が出来るだろう。」
「えらばれし事をこうえいに思います。必ずやスイカバーの剣を見つけ出し、あくまを打ち倒しましょう！」
　セリフを終えて二人は同時に踵を返し、自らの演奏ポジションに翻る。
　語りは再び、ミスティア。
「今ここに、勇者の運命は決まった！　最初は、秋に私たちが新しい巫女から聴かせてもらって、楽団を組むきっかけになった曲です。いざ進め、悪魔を討て！『Worrior of Ice ！！』」

　ここは、オーケストラの伴奏だけに乗せた独唱。

『Demons of abyss wait for my pride
　on wings of glory I'll fly brave and wild...
(地獄の悪魔達が、栄光の翼の我が誇りを待ち受ける。

動けずとも、リグルの体力消耗、ルーミアの精神力も相当なものだ。
「次々と侵略される賢者達の世界。悪魔の魔法使いにスイカバーソードを奪われ、悪魔の妹に無残に敗北してしまった氷の妖精たちは、幻想郷はどうなってしまうのか！」
ミスティアのナレーションを聴き、慌てて持ち場に戻って行くルーミア。
「さあ、クライマックス！」
ふぅっ！ と深呼吸をしたリグル。
六人の小さな戦士たちを、真っ白なスポットライトが灼く。
さぁ、１、２、３、４、リグルのスティックカウントで演奏再開。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あたしの声を聴いて！ あんたの心を救えるのはあたしだけだよ！！」
最後の曲が終わり、後は物語を締めくくるミスティアのセリフの読み上げだけとなった。
「悪魔の妹は、底なしの湖の上に張り出した処刑台からの、氷の戦士の言葉を聞いた……。こうして、紅い悪魔の残虐な破壊と殺戮をよしとしなかった、悪魔の妹の裏切りにより形成は逆転した。誤った所有者から、ついに氷精の手に渡ったスイカバーソードの聖なるパワーの一撃で、邪悪なる力を奪われた紅い悪魔は、ボロボロに傷ついた氷の戦士の最後の抵抗を振りほどく事は出来なかった。悪魔の妹は苦渋の決断をした。彼女は氷精の叫びに応え、勇者と悪魔がもつれ合う処刑台を作動させたのだ。二人は聖剣と共に、永遠に底なしの水底へと没したのである。悪魔の女王は死に、悪魔の妹が操る蝙蝠達が、次々と暗黒の軍勢を吹き飛ばす。幻想郷の戦士たちはその光景に驚きながらも、もはや自分達が囚われた敗者で無い事を悟り、彼女に加勢したのだった。また、悪の軍勢を操る魔法使いも、自らが育てた暗黒の魔法を操る悪魔の妹の裏切りに狼狽する中、白黒の魔女に打ち倒されたのだった。」

コーラスを一緒に歌えと煽る。
河童達が、ステージの背後の反響板兼スクリーンとなった壁に、歌詞を投影する。
『『『FROM THE SILENT HILL WE SCREAM LOUD YOUR NAME（静かなる丘から、貴方の名を呼ぼう。）
MIGHTY POWER OF THE DRAGONFLAME（ 強大なる竜の炎の力よ。）
FROM THE MOUNTAINS PROUD AND STRONG（誇り高く強き力の山々より。）
WE CALL OUR DRAGONLORD ！！！（応えよ竜神よ！！）』』』

このサビを二回繰り返し、曲が終わっても、聴衆の興奮は最高潮。
『『『（チールノ！ チールノ！ チールノ！ チールノ！）』』』
オーディエンスからのコールに、赤と緑のスイカ色に塗られたギターを、剣のごとく抱え上げて応えるチルノ。
「よかった。しっかりできてるじゃん私たち……」
リグルは、先ほどの曲でドコドコドコドコと延々続いたツ―バスの連打でジーンと痺れる足をのばしてしばし休めながら、ふと我に返ってため息をついた。
「チルノ、暴れすぎてちょっと危なっかしい所もあったけどね。」
今や一心同体のリズム隊、ベースのルナもリグルの方へやってきて、冷静に感想を漏らした。
頭を振って髪を振りみだし、ステージ上を走りまわるギターがずれても演奏が分解しないのは、ひとえにこのリズム隊二人とリズムギターの大妖精の頑張りと言えよう。
「でも、なんか楽しいよ。すごく楽しい。集まってるみんなの楽しさが、わたし一人に集まってるみたいで。こんなの初めてだよ！」
いつの間にか持ち場を離れてやってきたルーミアも、浮かれ気味に捲し立てる。
ステージを所せましと暴れまわり感情表現をするチルノとミスティア。
ルナチャイルドや大妖精まで既に大汗。

ええぇぇ！！！」
「うぉぉぉ俺は冥界に行くぞこーりんンンンンッッッ！！！」
「ちょっとリグルきゅんストーリーに絡んでないよおオォォ！！！ これリグルきゅんの雑誌じゃなかったっけ作者きいてんのかァァァ！！！」
「みすちぃぃぃ結婚してええぇぇぇ！！！ 私の為に毎日ヤツメウナギを焼いてくれええぇ！！」
「今まで黙ってたけど、ルナチャイルドは俺の幼な妻ぁぁぁぁ！！！ 毎朝一緒に新聞読むぞぉぉぉ眼鏡！ 眼鏡かけて来て眼鏡ぇぇぇぇ！！」
「大ちゃん抱き締めさせてぇぇぇ！！ そうして恥じらい頬を染める顔を見せてええぇえぇぇ！！」
……聴衆は、一分……五分……途切れぬ大拍手で、彼女らの頑張りを祝福した。

———————————————

……リグル達は、演奏を終えた数時間前からステージ横で観戦タイム。
このライヴ、各人準備期間が楽器を触ってから数カ月であり、限られた経験と練習量で一つ一つの曲を完成させ、ステージでの流れを構成する制約があった。
主催者魔理沙は、プロデューサーに外の曲を持ちこみ火付け役となった早苗を据え、様々な知り合いに出演を促したようだ。

『今宵も廻る　殺戮の Dinner　罪のドレスを濡らして
運命の人　予感がするの　こんなに月が紅い夜は……』

これを歌うのは、レミリア。

ここで、暗く激しい戦いのＢＧＭは終わり、ゆっくりとして明るい、雲間から光のさす様な穏やかなＢＧＭが流れ出す。
「かくして、幻想郷には平和が戻り、悪夢は過去の歴史となった。しかし、犠牲は大きかった。ちゃらんぽらんな白黒の魔女でさえ、美しき大地に降り注ぐ陽光の元、笑顔を取り戻すのには月日を要した。悪魔の猛進の前に、壮絶に戦い散った、賢者達は戻らない。氷の戦士の姿は、伝説の剣と共にもはやこの地にはない。悪魔の妹も、戦いが終わったその日から、ようとしてその行方は知れない。しかし、彼女らの勇気と気高き魂は、次々代へと語り継がれてゆく事でしょう。」
ここで、最後のセリフは再びチルノへ。
「こうして、心の中に宿る聖なる炎の物語は終わりを告げた。覚えておいてほしい。心に炎がともれば、どんな事でもやり通せる事を。あたいたちが今、この物語を演じ切ったように……。」
これで、リグル達の演目は全て終わり。
そのままライトをフェードアウトする予定だったが、誰が呼ぶでもなく、最後は自然に六人全員が舞台の前に並んだ。
そして皆で手を繋ぎ、観衆に向けて深々と一礼。
全員の手が、全身にかいた汗でぴたりと熱く強く結ばれた。
演奏にはミスもあった。
チルノは度々音を外していたし、リグルだって何度も音を飛ばしていた。
ミスティアのヴォーカル以外は、褒められたものじゃない場面が散見されたのも事実。　しかし、彼女達は自分達の想いを演り切ったのだ。ステージいっぱいを使い、汗だくになりながら、演奏したいという、想いを。
そんな彼女たちに聴衆は……
「チルノーーー死ぬなああああ！！！ 俺が代わりに死ぬぅーーむしろ二人で遠くへ ry」
「妖精は死なん。何度でも甦るさ！」
「ルゥゥミアァァァ生きろぉぉぉ！！ お前のいない幻想郷なんて滅びたも同然だぁぁぁ！！ 暗闇の世界でも俺の為に生きてくれえ

『闇より出でたる 魔性を祓い去る 光放つ十二神将
　我が足に集い呪詛（のろい）を込めて飛べ此の世の和を結ばんが為……』

　そして､益々古臭い妖怪､八雲紫と西行寺幽々子にその従者たちも益々古臭い和風な曲

『頤を　風に乗せて　晒し上げる
　此糸朱を奪う　剥き出しの肝を撫で付け

　鵺が嗤う　鵺が唄う……』

　こちらは、珍しく静かな曲をやったが、やっぱり和風っぽくて古臭い味付けだった、山の神社より新しく出来たお寺の面々。
　新しく出来たから新しい奴らなのかと思ったら、案外そうでもないのかもしれない。
　外界にしては珍しい妖怪がテーマの曲だったが、和楽器を交えた楽団で、はじめて見る真っ黒な妖怪がノリノリで歌い上げていた。

　他にも、地底の鬼や妖怪達。
　あとは死神や再び登場した冥界の二人と共にインストをやっていた、……真っ黒なスーツ姿に真っ黒なサングラスで顔がわからなかった緑髪の人は、普段見ない雰囲気だったけど誰だったんだろう……と、様々なメンツが舞台をにぎわせた。
　演奏を終えた、そのうちの幾人かがステージサイドで、幾人かがオーディエンスに混じり、幾人かが一歩離れた宴席から、次の舞台を眺めていた。

『『Can't Stop the painkiiilleeeer.....PAIN！！！』』

　普段二刀を振るう両腕で繰り出す、バタバタと凄まじい手数のドラムソロを背景に、魔理沙とアリスのギターヴォーカルユニゾンが木霊する。
　今舞台に居るのは、トリを務める楽団。

　件の紅魔館のメンバーも、ステージ狭しとメイド達の演奏部隊を従え、なんとオリジナルの新曲を含む数曲を披露。

『I will with pride now face my faith
　I bask in your favor, I have killed the king』

　魔理沙と共にこの宴会を企画した、東風谷早苗も乗り気だったらしい。
　山の天狗達や谷に住む河童のキーボーディストと、煌びやかだがチルノ達がやった勇壮な曲より、哀感とスピード感のあるメロディックな曲でギターを。

『声も 出ない くらい……　そんな 今に 一人と 気付く……
　The night is cold and long
　The night sky is deep and wide...』

　さらに早苗は直後、アリスやパチュリーといった魔理沙とその知人を従えて出演。
　吸血鬼達とはまた違った哀愁のあるメロディに乗せて、デスヴォイスとクリーンヴォイスを使い分け、ギターヴォーカルを取った。
　全員、黒を基調として、紅い模様やフリルの付いた洋風の衣装で統一していたのが妙に印象的だった。

『みどり絶えし大地にも 堕ちた天にも 五色の翼掲げて……
　羽に湛えた慈しみ すべての魂に 与えてそだたく

　暁夢見し 蒼き焔纏う鳳が 生（いく）のくにまで 舞い上がる……』

　やたら古臭い、平安から江戸時代を想像させる旋律をやったのは、竹林の奥にある、月の珍しい品を展示していた永遠亭の住人達と竹林に住む蓬莱人。
　永遠亭の主蓬莱山輝夜の、赤いＶ字型のギターを下げている十二単のヴォーカルというのは、中々インパクトがあった。

蟲の知らせサービスは、年の瀬も順調に営業中。
宴の主役への拍手と歓声は、年明けまで鳴りやみそうにない。
「おーい！！」
リグル達が舞台を振り向くと、魔理沙がオーディエンスの拍手にこたえながらステージサイドに手招きをしている。
どうやら、お前らも出て来いと言うらしい。
勇んで駆けていく氷精に、リグル達も続いた。
ステージに上がると再び、圧力を伴う熱い歓声に包まれる。
それは、リグル達の登場で益々大きくなった。
「もう、年明けまでカウントダウンだ。一発目でしっかり盛り上げてくれたし、お前もなんか煽り文句でも言うがいいぜ。」
息を切らし、汗を落としながらそう言われマイクを渡されたのは、偶然魔理沙の近くに立っていたリグルだった。
リグルは、マイクを握って考えた。

やたらいろんな楽団に顔を出していたギター魔理沙とベース咲夜（暇だったのか、練習時間に困らなかったのか……）、魔理沙とツインリードギターを奏でるアリスに、キーボードを弾く霊夢に、ドラムは紫達のバックでも叩いていた妖夢。
プリズムリバー楽団の協力も得て、ここまでで一番色々雰囲気の違う曲をやっていた。　魔理沙らしい欲張りだと、そう理解しながらリグル達は、ステージの真横と言う特等席で、これを眺めていた。
これまでのいくつもの楽団にも参加し、それだけたくさんの曲を彼女が弾けると言う事が何を意味しているか。
リグル達は、それも勿論理解しているつもりだった。そう言う部分は、あの人間を素直に尊敬する気持ちになるものである。
そんな舞台も、アンコールでやったこの曲で最後となる。
アウトロが響く中、ふと氷精が
「ねーリグル、今何時？」
時は、１２月３１日２３時５４分。

そんな投げかけを吐くと、少し真面目顔を作って、リグルはつづけた。
「いいこと、悪いこと、うれしい思い出、消えない後悔、いろんな事があった人が居ると思います。私は、今日ここに立っている事が最高にうれしい時間になっています。きっと、後ろの仲間達も同じだと思う。」
リグルは、ちらと後ろに視線を流した。
仲間達はみな、相違ないといった表情で満足げに笑っている。
魔理沙は、ニヤニヤしながらこっちを見ている。
「でもそれも、もうすぐ終わりです。いつも新年は楽しい気持ちになるものだけど、私は、今日に限っては凄く悔しい。いつまでも、年が明けないでほしいと思う。」
僅かなマイクのハウリング音に乗って、言葉の尻が夜の天蓋に木霊する。
聴衆からは、ぱちぱちと拍手も起こった。
「今が終わって、新しい年が来るのがめでたいのはなんでかって、ちょっとだけ考えた。不幸や、辛かった事や悲しかった事を忘れて、未来に踏み出せるからかな？ 私は、この数ヶ月、辛い事もあったし、体を痛めた事もあったし、どうしようもなくて、挫折しそうになったことだってあった。でも……」
リグルは、今度は後ろを振り返らなった。
「でも、それが今って言う何より楽しい時間を支えてくれてる。今のこの気持ちは、絶対にそういう時間とは切り離せない。そんな辛い時間も含めて、私は今の時間が終わってほしくない。忘れたくない。……今、２３時５８分１１秒……あ、蟲の知らせサービス御存知でしょうか。正確なお時間、確実な起床をお届けいたしますので、皆さん是非一度ご利用ください。」
ペコリ
と頭を下げるリグルに、会場からはどっと笑いが起き、少し緊張していた空気が、弛緩した。
「……私はまず、楽しかった今年にありがとうって言いたい。辛かった今年から未来に逃げ出さない。どんなに過ぎてほしくなくても今年は過ぎて、来年が来るのなら、私は苦しさとも楽しさとも全部と手を繋いで次に行く。過ぎて今日は大みそか。
２～３ヶ月、今日の宴会での演奏に向けて練習一色だったので、そんな事さえ忘れていた。
改めてその事を思い出すと、やはり年の瀬らしい感慨深さもわきあがってくるというもの。
寂しい様な、無性に焦りを感じるような、何か心が浮かされる、不思議な感覚。
そんな感覚に、この人間も、自分達も、聴衆も、宴を楽しむ中で益々、心を高鳴らせているのだろうか。
年が暮れ、年が明ける。
それは、人間が時間を数える為だけに設けられた、具体的意味は内包しない無機質な記号。
そんなつまらない物に、今日までの苦しくて、でも楽しい時間を、夢から醒めるように唐突に終わらされてしまった気がして、リグルは少し悔しい気がした。
「あー、あー……みんな、今日は私達ミスもあったけど、盛り上がってくれてどうもありがとう！」
一文喋って言葉を切るごとに、
『わぁーっ』
とっ、聴衆から反応が返ってくる。
「山の神社の巫女さんに外の世界の曲を聴かせてもらってから、毎日毎日、これでもずいぶん練習してきたつもりです。行き詰ったり怪我したり苦しかったけど、それ以上にとっても楽しかった。そして、今日ここでみんなと一緒に曲をやれた事は、今年一番の思い出になったと思います。」
舞台に上がった者の一挙手一投足がある毎に、大きな歓声で応えてくれる聴衆。
もう、あとほんの数分で、今年は終わる。
そんな、楽しかった時間も、終わる。
「みんな、もう間もなく新年です。新しい一年の訪れを祝う、『おめでとう』の言葉、今か今かとスタンバイしてると思います。」
オーッ！
と、同意を示すニュアンスのレスポンスが湧き起こる。
「折角新しい時を迎えるのにちょっと後ろ向きになるけど……、みんなにとって、今年はどんな一年だったでしょう。」

いく時間を歩む責任を持って、来年も、辛い事にも苦しい事にもぶつかって行く。来年ももう一回、過ぎてほしくない、終わりたくない、年の暮れが寂しくなるような、悔しい、もったいないって思えるような１年にする。ありがとう、辛くて楽しかった今年。私は……私たちは忘れないよ！　５９分３２秒です。さぁ、カウントダウン行こうか！」
　ステージに背を向け、万雷の拍手に背中をおされながら、リグルは魔理沙にマイクを返した。その後ろで、仲間たちと両手でタッチを交わす。
「オーケー、私も終わりたくないが時間は残酷だ。さあ、後１５秒。ありがとう今年、私も忘れないぜ〜〜！！！」
　ステージ暗転。スクリーンにはカウントダウンの数字が浮かび上がる。
『忘れない！』
『ありがとう！』
　聴衆から口々に飛び交うそんな言葉が、やがてカウントダウンに収束していく……６……

５……

４……

３……

２……

１……

　瞬間、大きな破裂音と共に、神社に住む鬼の花火が暗い夜空に咲く。
　それから照らす薄く赤い光に頬を焼かれながら、リグル、チルノ……六人の仲間たちは、ステージ上でしっかりと抱き合った。

『『『For the wise ！ For the land ！ For the mountains ！
For the green valleys where dragons fly ！（賢者達、大地、山々、竜神舞うこの緑の渓谷の為、）』』』
それでも、みんな笑ってるし、いいや。
例え、抗えずに刻まれる時間の名前が変わっても、今の楽しい時間は、私が終わらせないさ。
そんな素直な気持ちを持って、リグルもこの宴会で二度目の、今年初めての曲のサビのコーラスに参加する。
プリズムリバーの再現するオーケストラの大音量に乗って、まっすぐに頭のてっぺんから夜空まで突き抜けるように、聴衆と、仲間たちと一緒に大声を張り上げるのだった。
『『『For the glory the power to win the black lord ！
I will search for the Suika-bar sword ！（暗黒の王に打ち勝つ力と栄光の為、私はスイカバーの剣を探し求めてゆく！）』』』

２０１０年午前４時。
南西の空に傾くのは、完全な満月

Finale __

『Where the Rainbow Ends　There I go, there I mend...』

現在２０１０年１月１日深夜。
轟音鳴り響く博麗神社は、まだまだ宴会の真っ最中。
ステージ上では、未だに楽器をもって暴れている奴らがいる。
年明け後、これまで自重していたプリズムリバー楽団が、やりたりない各楽団のメンバーを少人数ずつ混ぜて、曲を演奏しているのだ。
そして今、客席のアンコールを受けて、チルノがステージに上がった所だ。
今日やった曲で、チルノが特にお気に入りの一曲をやるらしい。
チルノのパートナーであるキーボーダーにベースにギターの片割れがアルコールで潰れているため、メンバーは完全に混成だ。
「だーいじょぶだいじょぶ、たいがい音は私たちが出すから、あんたたちはテキトーに合わせて！」
調子のいいメルランの煽りに、腕まくりしてギターを構えるチルノと、先ほどからすっかり出来上がった状態で歌い続け、マイクスタンドを振り回しているミスティア。
「よぉ、よろしく頼むぜ勇者様！」
ツインギターの片割れを務めるのは、今日大車輪の活躍の魔理沙。
ベースには、永遠亭の楽団でやっていた藤原妹紅。
キーボードの位置に居るのは同じく鈴仙・優曇華院・イナバ。
ドラムは、紅魔館の門番紅美鈴が座っている。
リグルは、ステージには居るが特に楽器は持っていない。
というか、演奏してないメンバーや、何時の間にやら客席からも人が入り乱れている。チルノが引っ張り上げたレティ・ホワイトロックや、酔っぱらってフラフラと徘徊する八雲紫、それを追い回す八雲藍と、それについて回る橙と、乱痴気騒ぎも極まった惨状だ。　そんな中、演奏は始まる。

のだと思う。
　だが、だれだっていつだって、そんな包み隠さぬ自分をさらけ出せるわけではない。
　人の素直な心や感じたままというのは、綺麗な物ばかりじゃない。自らの理性をして身の毛もよだつ感情や、表に出すのを恥ずかしく思うような事があるはずである。
　そう言うものには自分自身戸惑うし、いざ他人のそれを打ち明けられたら、まず一瞬受け止めきれず困惑してしまう事が多いと思う。それに恐怖を感じるのも、自然なことだろう。
　今回は、文章で音楽をテーマにするという暴挙で、自分の力に余る文章表現を度々強いられて苦労した。そちらに力を割かざるを得なかった分、心理描写に関しては本当に僅かしか描けなかった。特にネガティヴな部分に関しては、読んでいて気持ちいい作品を目指した事もあって、説明出来ていない。
　劇中でキャラクターが感じた感情は、嫉妬や劣等感、無力感や絶望感だったかもしれない。
　それらは私たちの心の中に、大小様々だが色々な時にふとした事で簡単に生まれ、容易には取り除けない。そして、少しずつ私達の心を押しつぶして、歪めてしまう。
　だが、心に炎を灯し、自分の持てる全てでまっすぐに向かい合い、のしかかっていた重たいそれを踏み台に出来たなら、それは何より力強い自らの礎になりうるはずなのである。その上には、他の何よりもまっすぐしっかりと、自分自身を立たせられるに違いない。そこから紡がれる感情は自信に支えられ、説得力のあるものになるだろう。
　これは、冒頭の言葉の指摘した所を含みつつ、その言葉自体の血の滴るようなリアルさの説明でもあると思う。
　彼女の場合は、割合思考回路が単純だった事（失礼！）も幸いしてか、自分に生まれた負の感情を受け入れ、その存在認めた。（その正体を具体的な言葉にはできなかったが、それは我々自身がそれを感じた時と変わらない感想なのではないかと思い、そのまま書いた。）そして、それを伝える事が出来た。結果はご存じの通り。彼女達は心の奥に自然に芽生える暗い感

　あとがきとごあいさつ

　私は愚かな行為をしました。
　メインの六人のうち、ルーミアの挿絵だけを作らなかったのです。
　線画が気に入らず時間もなく、いつも真っ黒黒助してる設定だしいいだろ。と、勝手に考えていました。
　しかし、それは問題への答えではなく、自分に言い訳するための理由でしかありませんでした。
　あとがきまで全て描き終わった今、やっと気付けました。
　ルーミアを描かなければ、この物語には何の価値もない事に。
　それは、圧倒的な衝動でした。
　他の五人に一か月遅れてルーミアを描いた時、私は確かに、絵を描く事を命より大切に思えた。
　ごめんよルーミア、もう二度と君を裏切ったりはしない。
　ありがとうルーミア、君のおかげで僕は何かを描くという事の中で、何より大切な事を思い出せた。
　で、これ誰の雑誌でしたっけ。
　という感じで書き終わった物語の、以下あとがきになります。

　ある国際的に有名な年配の研究者の方が、これまたある方の偉大な業績とその方の言葉について、述べられていた文章より。
『一生の大半は「馬鹿にされている」と思いながら暮らす。それが人生というものではないだろうか。』
　研究される分野の新たな世界を切り開かれた、御歳７０以上になられる高名な大先生のお言葉。という、記号をつけるのは簡単な事。
　私に限っては実際にお会いし、他愛ないことながら会話させていただいた方の言葉。という、身内感情で理由づけをするのも簡単な事。いずれもくだらない。
　結局、ある言葉が人の心を打つと言うのは、その人の心からの言葉であるからにほかならぬ

になって……。何度も何度も繰り返す、わかったはずの問いかけ。そうやってぐるぐると同じ所を回る様に、少しずつ少しずつ、螺旋階段の様に昇って行くのが人生なのではないだろうか。繰り返しても、繰り返しても、進み続ける。伝え続ける。いつか必ず、誰かに伝わるから。私たちは、一人じゃない。
　あの冒頭の言葉は、今回の話の構想を固めてから見た言葉の中で、一番私の心を打った。というか、安心させてくれた。本当に心からの言葉というのは、誰かの居場所になれる言葉でもありうると思う。それが、絶望や孤独を謳っていようとも。なぜなら人が真に誰かを求めるのは、絶望や孤独の中でだから。

　さて、都合により、今回を最後に投稿者としての参加はしばらく休み、読者として感想を書くのみになると思います。
　でも、あとがきで語った気持ちがある限り、即ち私が私である限り、私は決してペンを置けないでしょう。
　最後に、登場していただいた、筆者の趣味であるヘヴィーメタルの楽曲の一覧を載せて終わります。リグル達のやった剣と魔法とドラゴンの世界から、東方ライクな旋律の激しくメロディックなバンドまで。興味が御有りの方は、いかがでしょうか？
　ここまで、前号のプロローグを除いても、秋の前作の二倍以上の文字量。ご編集いただく小崎様・拙作を長らくお読みいただいた皆様に、心からの感謝をささげます。ありがとうございました。
　今回この話を書いて、改めて思った事。
　私は、心から生きたい。皆様は、どうでしょうか。
　あなたに、どうか感動ある人生を。

情を、より根源的な所から湧きあがる衝動で撃ち破った。
　現実問題、お話の様に都合よくばかりいくわけではない。誰だって、不安と恐怖に勇気が出ない時はある。私だって今、押しつぶされそうなぐらいの不安と後悔を抱えている。
　それでも勇気を出して、負の感情を認めて向かい合ってきた事で得た大切な物が、いくつもある。それは、私にとっての今、絵や文を書く事の楽しさもそうだ。
　付き合い方は難しいけど、結局のところそれが人生。簡単な人生なんて羽根の様に、温かくて、軽い。勇気を出して、乗り越える努力を始めた一歩は、熱く、重い。
　氷精を救った仲間達の様な友人を得るには、難しい努力と数少ないチャンスの訪れが必要だろう。だが、友と心から語り合う時、その心とは何だろうか。こういった負の感情や根源的衝動の渦巻く心の最奥ではないか。
　ならば、そういう仲間を得るには、自分自身が自分と向かい合う事が不可欠になってくるのではないかと思う。
　それぞれの感じる不安、恐怖、孤独感、劣等感。「そうじゃない」「認めたくない」と、心のどこかに押し込められたそれは、どこか違和感やわだかまりにとなって私たちの心の中に居座り、私達の心を歪め、人生を心から楽しめなくしていく。今より楽しい人生を手に入れるためには、心の奥底に眠るそういう暗い何かと正面から向かい合い、それが本当の気持ちなら、それをも受け入れて、それよりも更に深い所にある衝動を持って乗り越え、次に進む事が必要なのではないだろうか。
　本当に思った事とまっすぐ向き合い、素直な気持ちを誤魔化さずにそのまま伝える。
　それだけが、技も才能もない私が魅力的でありうる物、リアルな感覚を感じられる物、誰かの心に届くかもしれない物を描ける、唯一の可能性だと思っている。今回あとがきで失礼ながら丁寧語を用いなかったのも、この方がまっすぐな気持ちが書けると考えたからである。
　こうして、不安にとらわれ、傷つき、乗り越え、得たはずの答えも、何かの拍子にまた不安

登場曲

１２月２４日

紅魔館	Cradle of Filth	Cruelty Brought Thee Orchids - Symphonic Black Metal
魔理沙とアリス達	聖飢魔 II	蝋人形の館 - Heavy Metal
紅魔館	同	悪魔のメリークリスマス
	X（X-Japan）	紅 - Heavy Metal

回想

早苗と天狗達	Carcass	Heartwork - Melodic Death Metal

１２月３１日

チルノ達	Rhapsody	Worrior of the Ice - Symphonic Metal
	同	Power of the Dragonflame

紅魔館　　Unlucky Morpheus　The tower of the blood（上海アリス幻樂団　亡き王女の為のセプテットのカヴァー曲）- Melodic speed Metal

早苗と天狗達	Sonata arctica	Wolf&Raven - Melodic speed Metal
早苗とアリス達	Dir en gray	CLEVER SLEAZOID - VISUAL-KEI Metal Core
永遠亭と妹紅	陰陽座	鳳翼天翔 - Heavy Metal
八雲家と西行寺	同	陰陽師
命蓮寺	同	鵺
魔理沙とアリス達	Judas Priest	Painkiller - Heavy Metal
三姉妹ほか	Dreamtale	Where The Rainbow Ends - Melodic speed Meta
みんな	Rhapsody	Emerald sword

Respect for Heavy Metal ！
Respect for Shan-hai Alice ！

〈作者コメント〉
大晦日・新年の夜は是非空を見上げてみて下さい。彼らの見た満月が、見えるかもしれません。

Happy New Year

preludenano

p58～p60

チルノ：やっべ、ふくわらい楽しすぎワロタｗ

*その後ルナチャイルドはお雑煮を食べて機嫌を直しました。

無題

夜行

p95

屋台っていいですよね。あのローカルな雰囲気がたまりません。リグルもミスティアの屋台でいつもぬくぬくしてるんでしょうかね。
リグル、リグラー、リグリエーターの方々に心を込めて。

表紙

小崎

カモン寝正月！

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

紅軍鉢巻２
秋水
p2

ゼッケンの汚い字まで忠実に再現！！…なんつて。簡単なので皆さんも作ってみて下さい。触角はそこらに落ちてた靴用のボンドでつけました。アロン●ルファだとガビガビになって大変だよ。

I.B.椛は白狼天狗なりや？
羅外
p16

またテーマ特集に参加できませんでした！
次回のパロディ特集には参加したいです。

GOGO大ちゃん　その２
草葉
p17～p18

冬コミ 二日目 フ-14a「草葉式」 で大ちゃんのエロ本を出します。よかったら覗いていってください。GOGO大ちゃんのコピ本も少量出せるかと思います

冬コミ告知
東
p20～p22

ある意味正月よりも大事なイベントが近づいてきましたね！とゆうわけで冬コミ告知でした。そして皆様また来年もよろしくおねがいします

無題
Step
p46

はじめてテーマに従ったものが描けた！　かな

蟲の手帖
HOUSE
p47～p51

最近思わぬところで月バグの読者様と遭遇しました。
世間は広いようで狭いらしい。ビックリしたー。
さて、今号が出るころには09年も終了間近。
皆様本年はいろいろとお世話になりました！
蟲手ともども、2010年もよろしくおねがいします！

リグると！
ひどぅん
p52

どれがだれの夢？
あぁ、内容については夢だから気にしないでね！

お正月漫画デュエル編
くらげん
p53

なんか白黒で申し訳ありません。よろしくお願いします。

無題
草加あおい
p54～p55

ネタが思い浮かばず苦肉の策です…　幽リグが多いですが、あくまで「リグル」の本ですので特定のCPは控えたいと思ってはいます。ただ、色々と便利なんでついつい…　冬コミ、３０日（水）東ヒ-47ｂに「七輪大社」出ます。地霊本ですが。宜しければ遊びに来てください。

リグルの年末年始
キッカ
p56～p57

みんなに振り回されるリグル。非常に良いです。漫画難しいなぁ……。
そういえば、冬のこみトレに出るので何か告知できればいいなぁと思っていたことを今思い出した。。

月刊ナイトバグ　2010年1月号

2009年12月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

と、いうわけで小崎です。
虫の手帖を読みはじめてから9ｋｇ減りました。ありがとうリグル。頑張れリグル。

そんなこんなで私の体重以外は企画上特別変わることもないまま、無事に2009年中のラスト発行を迎えることができました。

今年も年の瀬までリグルを愛し、当月刊NIGHTBUGを支えていただいた皆様、ありがとうございました。
来る2010年、本誌もますますリグルを盛り上げていけるよう、ここまできたら行けるところまで走っていきたいと考えておりますので、引き続き応援いただけますようよろしくお願いいたします。

2009 / 12/ 22　小崎

次号2月号は1月22日（金）発行予定！

※次号の投稿締切は1月15日(金)です。2010年も皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

夜行

月刊NIGHTBUG　2010年1月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

銅おりは
如月翔
西遊
壁々
くろと
夏樹 真
Jade.
黒ストスキー
秋水
東
夜行
草葉
羅外
ADDA
IDEA (GAGRim)
Salka
ウリック
貴キ
蛍光流動
怒羅悪
巳
涼音 奏
緑
HOUSE
preludenano
Step
キッカ
くらげん
ひどぅん
草加あおい
小崎